

ぶどうの木

第 29 号 29



基督伝道隊

八幡前田教会
福岡大濠公園教会
戸畑教会

目次

はじめに	櫻本 和義 (大濑)	1	信仰口上(魂シリーズその二)	正野 真宏 (前田)	22
信仰告白	金子 やよい (前田)	2	娘の婚約	小松 南子 (前田)	26
信仰告白	平野 馨 (大濑)	2	娘の結婚	小松 南子 (前田)	27
信仰告白	山本 ハル子 (大濑)	4	詩集「別れの日々」より		
母の受洗を感謝して	山本 幾代 (大濑)	5	(暗くはあるが暗くはない)より	伊規須 太郎 (戸畑)	30
あしたの覚え その一	上野 米子 (大濑)	6	我が思い出(移動編二)	鈴木 一幹 (前田)	43
あしたの覚え その二	上野 米子 (大濑)	7	北欧四力国周遊旅行訓	正野 真宏 (前田)	52
一人旅老牧師夫妻をたずねて	貞 サユリ (前田)	9	福岡浜町基督伝道館(福岡大濑公園教会の前身)		57
「主の手の中で」	貞 サユリ (前田)	11	思い出の断片 昭和七年頃から二十年頃まで		
指しやぶり奮戦記(パート二)	大長光 恵子 (前田)	12		野村 末義 (前田)	
主による平安	石井 勝三郎 (前田)	14			
	石井 二三子 (前田)				
妹、吉永知代の召天を通して	大石 祥代 (大濑)	17			
命名	大口 和子 (前田)	20			

はじめに

榎本 和義

「あなたがたはわが証人、わたしが選んだわがしもべである。」
イザヤ 四三章十節

「ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう。」
使徒行伝 一章八節

わたしたちが尊い主の救いにあずかったのは、ただ自分の生活の安心立命を与えられるためだけではありません。確かに、人生の悩み、苦しみ、悲しみなどの様々な困難や病から、解放されることはうれしいことですし、心から救われたと喜べることです。また、神様はそのような恵みを豊かに与えてくださいます。しかし、神様がわたしたちを選んで、独り子、主イエス・キリストの十字架によって、罪を許して、神の民、神の子としてくださったのは、わたしたちを神様の「証人」また「しもべ」として、神様ご自身の栄光を現そうとするためです。

かつて、アブラハムを選んで、彼に祝福を与えて、その子孫をイスラエルとして神の選びの民となさいました。それは、イスラエルを通して神様の栄光、神様の力、知恵、業、存在を明らかに証明するためです。今、信仰によってイスラエルとして神様の証人、しもべとして立てられています。ここに集められた「あかし」はまさに神様を証言するものに他なりません。読者の方々が神のみわざを悟って、心から主を崇め、主を拝するものとなられるように願っています。



信仰告白

金子 やよい（前田）

幼くして母親と死別し、いろいろな意味で苦勞ばかりで、成人しても、やはり悲劇の主人公のような人生を過ごしました。七十も近くなり、健康面でトラブル続きで、毎日毎日、一人で地獄の苦しみの中で、生きがい無くし、死ばかり考えておりました。そんな苦しみの中で、ふといとこの顔が浮かびました。

逆境の中でいつも感謝し、喜びの気持ちを持ち、おだやかな生き方をしている、いとこに助けを求めました。こんな私を教会に連れて行つてと、救いを求めました。聖日礼拝に出席させていただき、はじめは聖書の意味もわかりませんでした。だが、教会の空気の中に居るだけでも、私の心はだんだんといやされてきました。

小さい時からキリスト教は外国の宗教で良くないと思ひ込み、神様をないがしろにしてみました。先生のお話で、これは私の大きな罪であり、こんなおろかな私のため、主イエスは十字架にかけられたことを知りました。それでも神様はこんなおろかな信仰のにぶい私を愛し、赦して下さることを心から感謝致します。ありがとうございます。

ですから、洗礼を受けて生れかわり、これからは神の子として、皆様のように、御言葉を沢山貯えて、生涯神様にお従いできますようになりたいと願っております。

アーメン

平成十三年七月八日

信仰告白

平野 馨（大濠）



私は若い時から神社・仏閣、その他一切の宗教には無関心でした。

ところが、一九八六年、今から丁度一五年前、私達の家庭に突然異変が起りました。長男博が統一協会に入信し、勤めていた会社も辞め、家を出てしまつたのです。当時、世間を騒がせていた統一協会のことを、私達は何も知りませんでした。

た。私達は驚き慌てふためいて、なすすべもなく悲嘆に暮れていました。その時、長女みち子の義父上野幸清兄の「教会に行かなければ。大丈夫だから」の一言に私達は救われました。

その時以来、大濠公園教会にて榎本利三郎先生、和義先生にお祈りとお励ましをいただいて参りました。一方、息子博は家を出て、何処で何をしているのか解らないまま年を越しました。年が明け、八七年一月一日新年礼拝に出席させていただきました。帰宅した私達に突然大分県宇佐市の病院から、博が交通事故で入院しているとの電話が入りました。このとき、看護婦の方が統一協会に無断で電話してくださったのも、神様のお働きであったと思います。直ちに家内と共に博の入院先に駆けつけました。

博は一月一日午前三時ごろ、統一協会員数人と移動中、宇佐市内で交通事故に遭い、第一腰椎圧迫骨折、足指骨折などで、数ヶ月入院治療を要し、統一協会員が付き添うということでした。しかし、家内が病院に泊まり込み看病、私は毎週宇佐の病院と自宅とを往復、その間、榎本利三郎先生、和義先生を始め、教会員の方々の篤いお祈りをいただき、博の傷も次第に快方に向かつて参りました。一月終わりに病院から転院の許可が出ましたけれども、福岡での受け入れ先の病院

がなかなか見つかりませんでした。二月に入り、知人の紹介で、前原市の舌間整形外科が受け入れてくださることになりました。たまたま宇佐の病院の主治医の先生と舌間整形外科の院長先生が長崎大学以来の親友とのことで、転院も障りなく出来て良い先生に恵まれ、神様の素晴らしいお働きに、唯々感謝いたしました。

博は三月末退院し、通院治療することになり、後遺症も残さず、私達のところに立ち返らせていただきました。唯々神様のお恵みに深く感謝しました。その間、統一協会の働きが見え隠れすることもありましたが、博もこちらの教会に出席させていただくようになり、神様にお従いさせていただきます。博と家内は八八年六月二六日受洗いたしました。

当時母と暮らしていた妹が八七年暮、発病入院し、翌年二月に亡くなりましたため、私は九〇才を過ぎた母を引き取ることになりました。母との生活が一〇年近く続き、私は教会のご礼拝を欠席することが多くなりました。母が九七年二月、一〇一才で亡くなり、その後、教会に出させていたただいていますが、受洗に至らず今日まで過ごして来ました。この一〇年間に、博には仕事を与えられ、良き伴侶に恵まれ、孫も二人与えていただきましたが、昨年二月孫の守が突然「若年性骨端炎」を発病し、装具を着けて小学一年の入学となりまし

た。思い掛けないことに家族一同悲嘆に暮れていましたが、これも神様のご計画のうちにあるものと、神様にお委ねして祈って参りました。小学校も色々取り計らって下さり、友達とも仲良く、元気に通学しています。神様のお恵みに日々感謝です。

私がこの度受洗させていただくことを決めた日に、守の装具が松葉杖に移行できるようになったとの知らせを受け、「天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある」(伝道の書三章一節)ことを、身をもって実感させていただきました。主のお恵みと、先生方のお祈りと教会員の方々のお祈りに深く感謝申し上げます。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」(ヨハネ一五章五節) 主イエス様を信じ、しっかりとイエス様につながっていなければ何一つ出来ないことを悟り、受洗させていただくことにしました。

二〇〇一年七月一五日洗礼式での信仰告白



信仰告白

山本 ハル子 (大濠)

わたしは今年八四歳になりましたが、これまでひとりですつと苦しみをかかえて生きてきました。多くの人を悲しませもしました。子どもたちが教会に行っても、こんな私は教会に行く資格もないと思っていました。

でも、今、この私のためにも、イエス様は十字架にかかって、私のために死んでくださり、私の罪を許してくださいましたことを知りました。私はイエス・キリストを信じます。新しく生まれかわり、イエス様におしたがいで、残された地上の生涯を感謝して歩み、永遠の命にあずかる者となります。

まだ聖書のお話もよくわかりません。お祈りもうまくできません。でも、聖書のみことばを信じます。これからも集会に出させていただきます、聖書を読み、お祈りをする毎日をするように願っています。

どうか、皆様のお祈りの中に加えていただき、お導きください。よろしくお願いいたします。

二〇〇一年七月一五日 洗礼式にて

母の受洗を感謝して

山本 幾代（大濠）

「わたしと一緒に喜んでください。いなくなった羊を見つけましたから」ルカ一五章六節

「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」マタイ三章一七節

「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」使徒一六章三一節

この聖言を聞いて、もう四〇年近くなるでしょうか。「ああ、お父さんもお母さんもイエス様に守られている、大丈夫だ」とその時思いました。でも、次の瞬間不満になりました。主はたしかに父母を守っていて下さる、救ってください。しかし、当の両親がそのことを知らないのでは本当の喜びはないのではないか。両親が共に自ら主を求め、主を信じ、永遠の命の喜びを知ること、そのために祈りつづけること、これが私の課題となりました。

父は「わかっている」と言いました。母は「わからないから」と避けました。二人が神を信じ、教会に行くという日は

決して来ないと思う時もありました。一方、この祈りが聞かれないはずはないという確信は常にありました。でも、父の生前、両親が二人並んで椅子に座り、互いの手を互いのひざの上のせて、肩を寄せ合って、テレビを見ている姿を見て、今、この二人がイエス様に守られている幸いを実感してくれたらなんと素晴らしいことだろうにと思ったことが何度あったでしょう。

「求めなさい、そうすればあたえられるであろう。そしてあなたがたの喜びが満ちあふれるであろう」ヨハネ一六章二四節

「あなたはイエス・キリストを信じますか」父はたしかに「ハイ」と答えて、額に十字架を印されて、御国に帰りました。そして母は昨日「わたしはイエス・キリストを信じます」と信仰告白をし、バプテスマを授けていただきました。

「毎日毎日、落ち着かせてくださいと祈っていたけれど、今日はそんなお祈りは忘れてしまった。する必要はなかった」と今日母は言いました。私も一日何か心が穏やかでした。今、たしかに主は私の祈りに完全に応えて下さいました。何度いられだち、疑い、つぶやいたことか。しかし、主は全てを許して、この時を与えて下さいました。ただ感謝あるのみで

す。この主がこれからも守り導いて下さることを信じて、お
従いしていきます。

あしたの覚え その一

上野 米子(大濠)

四〇年前の課題は成就しましたが、家族は増えてきていま
す。新たな課題を持って、母と二人、信じて祈っていきます。
皆様のお祈りを心から感謝いたします。

二〇〇一年七月一六日



御聖名を崇めて感謝申し上げます。

細き雨脚を交えて、時にはつよく降る雨、梅の実も熟して
つゆの季節を迎えました。神様のなさることは、皆その時に
かなって美しいと御旨を語っておられます。つゆの中休み若
葉をくぐり抜けて流れる一條の陽光はホット私達に安らぎを
与えます。我が家でも梅干を漬けました。感謝です。ブドウ
の実は初秋を覚える頃がまいります。紫水晶を思わせるマス
カット、巨峰、サンデルーと芳醇な香り高きブドウが盛り籠
に溢れることでしょう。

おことばに「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は
農夫である」、「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝で
ある」と二者の結びつきを語っておられます。「もし人がわた
しにつながっており、またわたしがその人とつながっておれ
ば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れて
は、あなたがたは何一つできないからである」とみことばを
いただいております。

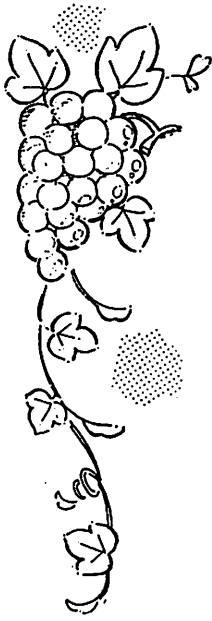
二十八号「ぶどうの木」をいただきました。ぶどうの実も
たわわに実り、甘味豊かに香り高く色づき、主の御業をほめ

たたえております。一粒一粒は私達自身です。酸いも、甘いも、辛いもありましようが、ぶどうの木である主につながっておれば、つぶらな実は一つ一つ甘味豊かに楽しませてくださいます。

今朝も御器なる先生のお声に接し、「弱った手を強くし、よろめくひざを健やかに」していただきました。お声は一滴の注射液となり強めていただきました。「隠れたところにおいてになる」、「隠れた事を見ておられる」主は、いつも共にいまして、今日もまた御愛と力をたまわり、命の道を歩ましめて下さいます。あるページの隅に、「人見るもよし、見ざるもよし、われは咲くなり」と名僧のおことばがありました。花を咲かせて下さる方はどなた様でしょうか。「聖なる主ご自身」です。

感謝して、このつたない稿をささげました。

平成十三年七月十四日



あしたの覚え その二

上野 米子（大濠）

十月の或る朝

あさまだき、神の霊みなぎり、大気の流れは時々刻々季節の移り変わりを示し、長期の雨、炎暑の夏、又、秋の冷風を送り、主は御臨在をあざやかにお示しいただいております。「主は生きておられます」

私達、神の霊をもつて造られ、全能者の息を吹き入れられて、命ある者として生かされました。故に、私達の人生は神によつて造られ与えられたものです。御旨によつて、長き生涯、短き生涯もありますが、その時をお持ちになる方は主ご自身です。ゆえに、命の御ことばに従つて歩み、いつも御聖霊により、御聖別を覚えて、御霊のお声を聞いて共に歩まねばなりません。

「あなたがたは生ける神の宮である」
御聖別に与っている私達は神の証人と成つて、主の御栄光を拝する働きをせねばなりません。

平成一三年十月

鳩を通して

御聖名を崇めて感謝申し上げます。

大宇宙を創造し、全能者の御手をもつて、命ある者を生かすめ、すべての根源者なる造り主を崇めて感謝申し上げます。

底知れぬ青く澄んだ大空、清けき大氣の流れ、ぼつかりと浮かんだ一点の白い雲、どこに運ばれて行くのでしょうか。

午前五時二十分、主は申されました。「汝ら目を覚まし、感謝のうちひたすら祈れ」と、おことばを聞きました。突如として鳴き出したせみの一声は、いよいよ今日の営みのはじまりです。暑き日がつづいておりますが、これもまた主の御旨と覚え、今日の歩みを祝してくださいと祈ります。

主の御愛

「我が愛する者よ、我が美しき者よ立って出て来なさい。」
もろもろの花が咲き、鳥のさえずり、山鳩の声が聞こえます。イチジクの実が結び、ぶどうの木は花咲いて、かんばしい香りを放ちます。「我が愛する者よ、我が美しき者よ立って出て来なさい。」そして、主は鳩に呼びかけて申されました。

「岩の裂け目、がけの隠れ場に居る我が鳩よ、あなたの顔を愛せなさい。あなたの声を聞かせなさい。あなたの声は愛らしく、あなたの顔は美しい。」

主は再度呼びかけて、主の愛する平和の鳥として尊く用いられました。主は祝福をあらわす日、鳩を大空に解き放ち、その御愛を示されました。翼を開きて大空に舞う鳩の喜びの聲が聞こえます。雅歌三章十四節

平成一三年八月

同時多発テロ事件

音もなく静かに降り注ぐ、秋雨に託して、造り主なる神様はこの小さな者に主の御心をお聞かせいただきました。この度、強大国アメリカに起きた同時多発テロ事件、私には深い事情はわかりませんが、有り余る程の財を持ち、過信したところに、日頃快く思わない国の憎しみとなったのではないのでしょうか。限度を超えて我が身にあまるものは、すべて欲がからみます。「欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生み出す」と神は御旨を語られております。

なにとぞ、限度を越えて思い上がることなく、神によって与えられた信仰のほかりにしたがって、つつしみ深く思うべきであるとおことばをいただいております。只、お独りの造り主で造られた大宇宙を大切に、あわれみ深い主の御愛

のみての中に生かしてくださいますようお祈り申し上げます。「主、主、あわれみ給え」と祈ります。

平成一三年一〇月一日



一人旅老牧師夫妻をたずねて

貞 サユリ（前田）

あなたがたの切り出された岩と、あなたがたの掘り出された穴を思いみよ。

イザヤ書 五一章一節

五月廿一日（月）、生まれて初めて乗る飛行機の旅。二ヶ月前より、割引特安の航空券を求めていた。祈りつつ待ち望んでいたが、行く日が近づくにつれ、緊張感が高まってきた。

大丈夫だろうか。途中で具合が悪くなったらどうしよう。目的地に無事行けるだろうか。不安がつのる。

わたしはあなたに命じたではないか。強く、また雄々しくあれ。あなたがどこへ行くにも、あなたの神、主が共におられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない。

ヨシユア記 一章九節

御言葉が与えられ、すっかり不安はとれ、安心して旅立った。飛行機に乗っている時も、ゆれもあまり感じなく、一時間半で羽田に着いた。出口を出て、公衆電話を探すのだが、なかなか見当たらない。だい分歩き廻って、やっと見つけ、姪に電話した。「新宿のバスの着くところで待っているから。」ホッと安心した。年のせいか、少々ボケ始めか、自分のふがいなさが情けなくなつた。何しろ初めての東京。バスに乗り、右も左もさっぱり分からず、唯、車窓から見える、東京タワーや、何十階建てのビルが立ち並び、驚きのまま五分程で新宿に着いた。姪の案内で総武線に乗り込んだ。一時間足らずで船橋に着いた。駅で降り、先生に電話した。指示通りの行動をし、先生にお会いした瞬間ホッとした。八十八才の先生は、かくしゃくとしており、以前、病気をされ大変

だったとか……先生と一緒に、奥様が入院している病院に向
った。津田沼から、新京成電鉄に乗り、北習志野で降り、タ
クシーで病院に向かった。先日、先生よりお便り頂き、病室
で讚美歌も歌えるし、お祈りも出来るよ。私は胸の、ときめ
きを押え、三十六年ぶりにお会いする奥様、嬉しさで一杯、
もうすぐ会える、……何から話そうか……病室に入ると、アツ、
と息をのんだ。ベットの頭部を少し傾斜して居り、私をジ
ッと見つめていた。何も云わない。私は思わず涙が出て来た。
奥様の手を握り、ポロ、ポロ涙が止まらない。先生が、「さゆ
りちゃんよ、九州から来てくれたのよ。」でも、奥様は無表情
だった。先生が讚美歌を広げた。「さあ、歌うよ。」聖歌三九
二番、「神は、ひとりごを、給う程に。」私も一緒に歌った。
そしてお祈りをした。同室に、四人患者さんがいたが、皆静
かに私達を見ていた。入院年月日は、平成十一年十二月、と
書かれていた。一年半も、病氣と闘いながら頑張っているの
だ。

一まず、先生の自宅に戻った。車で二十分程。こんな遠い
処迄、先生は毎日通っている。奥様の為に、私は唯々、頭が
下がる思いである。中学生の頃別れた先生の娘が自宅で待つ
ていた。「千尋ちゃんあん。」私は、手を取り合って、再会を喜
んだ。私より十才年下である。家庭を持ち、三人の子供に恵

まれ、幸福そうであった。なつかしい昔話に花が咲き、時を
忘れ夢中になってしまった。

明くる日、又病院へ行った。食事も流動食を少しずつ先生
が食べさせていた。私は色々と話しかけた。昔の事や、思い
出すまま喋った。少し、笑みを浮かべ、口を動かしている。
私は奥様の口もとに、耳をあてた。かすかな声で、さ、ゆ、
り、ちゃん、と云った。アツ、分かって頂けた。又、涙、涙。
今日は帰らなければならぬ。「又、来るからね。」と別れを
告げ、名残り惜しみつつ船橋を後にした。

人は誰も病み、戦い、死を迎え、イエス様の所へ帰って行
く。伝道の書三章に、すべてのわざには時があるとある。待
ち望んで再会の時を、主が与えて下さった様な気がする。ま
だ、ずーっと、ずっと生きていてね。又、きっと会いに来ま
すから、と誓って帰宅した。

五月三十日記



「主の手の中で」

貞 サユリ（前田）

幼い頃から あらゆる病魔が襲い

何度か 死の門をたたいたが

門前で 神様が 「まーだ来ては駄目だよ」と

手を左右に振り 追い返された

とつくに六十五年の歳月は流れた

今 老いの入口に立っている

病魔が 次から次へと しのび寄る

痛い 苦しい でも泣いてはいけない

「いつも にこやかでいなさい」と

使命は何だと、問いかけてくる

家事 雑用 多忙 が いつも わたしを

追いかけてくる 「神様 助けて」と叫ぶ

「わたしが いつも そばにいるよ」と

ささやいてくださる

主の愛の手の中は 幸福 感謝 喜び

平安『我等の国籍は天にあり』

もうすぐ 天国が見えてくるから

神様 有難う 今しあわせ一杯

感謝 一杯です

私は主の手の中にいる 少し暗いが暖かい

時々強く握られる でもそれは愛の鞭

わたしは 主の愛の手の中にいる

粘土で 神様から身体を造って頂いた

時々 もみくちゃにされる でも 又

もと通り修復してくれる

主の愛はかぎりなく 永遠に主の手の中に

住まわせて頂くことができる

主の手から わたしを離さないで

いつも主の手の中にいさせて下さい

そこにいと 痛みも苦しみも消えうせる

主の指の窓から外を眺めると

何と心地よい 天国の軟らかい布団のよう

主の手は暖かで 軟らかい

でも 時々にかい水を飲むこともある

それは命の水 尊い水

あゝ 今 生かされている幸福 喜び

感謝の泉が 沸き出てくる

平成十三年八月 酷暑 記

指しやぶり奮戦記(パート二)

大長光 恵子(前田)

いつから指しやぶりが始まったのか、気がついたら右手の親指をチュウチュウやっていました。最初の内はその仕草が可愛いし、している間はおとなしく、グズグズ言わずにネンネしてくれるので大助かりと思っていました。このままで……という気持ちもありました。まあ、小学校に入る頃には、止められるだろう、と思っていました。

ところが、気がつく、いつもいつもチュウチュウしています。

「やめようね」と言っても、

「美味しいもん」。

「やめようね」。

「だって、好きだもん。チュウチュウ」。

いつもこの繰り返しでした。

歯医者に行った時、先生に「出っ歯になりますよ」と言われ、黒いマニキュアを塗ってみたけど、最初、びっくりしただけで、後は、またチュウチュウ。

まっ、いつか、無理しなくても……。

ある日、教会で、いつものチュウチュウをしていた時、なかなか止められなくて、と正野さんに話していたら、「ぶどうの木(第十一号)の『指しやぶり奮戦記』を読んだら」と勧めていただいて、早速借りて読んでみました。

祐一郎には、鬼検事はいませんが、ふやけた指を見せて、「くさい指を新しい指にしてくださいように、チュウチュウ止められるように、一緒にお祈りしましょうね」と言って、祈りました。

それで、そのまま夕方まで過ごし、さあ、夜寝る時、どうなるかと思っていましたら、本当にしないで眠ってしまいました。不思議！私の方がびっくりです。

次の日の昼も夜も、その次の日も……。

神様は本当に「指しやぶり奮戦記」(パート二)を起こしてくださった。神様は祈りに応えて下さるとは知っていたけど、本当のことだったんだ。そう言えば、このことでは一度もお祈りしたことなかったなあ。ぶどうの木を読んで良かった。感謝です。

「祐一郎、チュウチュウやめたの？」とパパから聞かれて、「うん、やめた」。

「なんで」。

「イエス様に、したけ」。

「フーン」。

ついこの前、指をくわえた祐一郎を写した写真が出てきて、
パパが私に「何で、やめられたのだろう？」と聞くので、

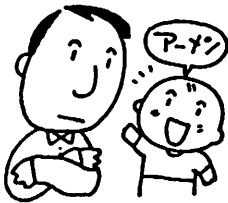
「神様に、やめられるように」一緒にお祈りしたの」と言うと、
「フーン」。

大きな大きな、手に負えない問題の時は、迷わず神様にお祈りするのに、子供の指しゃぶりくらい……と、神様にお祈りすることさえも忘れていました。

祐一郎は指しゃぶりをしていたということも忘れてしまう
かもしれませんが、私は忘れないで、祈れば応えてくださる
神様がいらっしやることを、子供達に話してあげたいです。

「神の造られたものは、みな良いものであって、感謝して受ける時、何ひとつ捨てるべきものはない」

(テモテへの第一の手紙四・四)



主による平安

主イエス・キリストの御名に感謝してお祈り申し上げます。

石井 勝三郎 (前田)

石井 二二三子 (前田)

(日記より)

(信徒会でのお証し)

三月九日

天のお父さま有難う御座います。

聖日礼拝に引き続き、信徒会へお召し下さいましたことを

感謝いたします。

金、土、と頭の中が不整理になりかけてきた。

主との語らいかけがどんなにか私の心を和ますのであろう。

去る七月六日より食道癌切除のため入院致しましたが、私

心弱きため再度切除をあきらめ、心の中に勝手に神の愛を極

めたり致しておりましたが、神は私の側を常離れず 心弱ま

る時御支え下さりました。ようやく神の声をいただき、平常

心をいただいたとき、入院して三週目を経過致しております

た。手術の際の医師の不手際、本人の体調による死亡率、5%、

術後感染症によるもの5%と医師からのこの様に手術の難業

なることを聞かされて居りましたが、主は私をばげまされ、

又真夏の暑い最中、榎本牧師も再度、私の病床に見舞れ、主

の御言葉をお伝えお祈り下さいました。

只今、今日、この様に無事に痛みもなく、今迄通りお祈り

致して居ります私をみて、くすしき主の御業と感謝致してお

ります。

みも半分はすべて半減となすべし。

全ての痛みを石井と半分の痛分けでどうじゃ。そしてどん

な喜びも半分ではどうじゃ。」

この夜半の語り掛けは、私に対する呼びかけであり、私は、

只々イエス・キリストに感謝するのみである。

まだ苦しい発作があります。

神様は常に共に戴き、

共に居て下さいますから、

痛みも苦しみも神と分ち合ふと思へば、
その樂しみと嬉しさが胸の中で踊ることを思へば
すべてのもの忘れさられるのでしよう。

主と共にいませば

主と共に有りしと願ふ。苦しみの中から

主は我れと共に歩むかと一声、二声、三声と声を掛け下さ
れば、我れ主のものわれのものとなり戴きしどん病も快樂に
変じ 主と共に分けあたふ 楽しきかな、わが人生

主人は九ヶ月の闘病生活でした。病室で書き潰したノート
に主の声なり、主との語らい等、ごく短い文章が二、三あり
ます。心を和ませていたのでしようか。ただひたすら病魔と
闘いながら、讚美歌を遠く近くに耳にしながら、静かに神の
国へ迎えられました。

三回目の退院は二夜でしたけど、こうこうしいようなきれ

いな顔に見えたのが、いつまでも心に残っています。子供が
置いてくれた枕もとの讚美歌がよかつたようで、喜んでいま
した。翌朝四時半、救急車で家を出ました。四回目の入院で
した。

榎本先生、金生先生、何度もおいでいただき、有り難うご
ざいました。教会の皆様にもお祈りいただき、十分に届いた
ことと思います。有り難うございました。

尋ねれば必ず返ってくる返事、まだまだ問うてみたい事も
沢山ありますので、もう少し生きていてほしかったです。私
もまだつかみ所のない海原に残されているような気分です。
天国からスーちゃん二人で見守っていて下さいね。

二二三子

以上は石井兄が闘病中、召される直前に残された言葉をそ
のまま書き写したものと、奥さんの二三子姉のお証しです。
癌の治療で、いろいろと苦しいことも多かつた事と思いま
す。主を知り、主との交わりのうちにおかれることで、この
ように平安が与えられ、勝利を得た様子を見せていただき
ました。私たちも兄弟のように、主にある平安をもって、日々
歩んでいきたいものです。

① まだ苦しい笑の下があります。
神祿は常に共に戴き共に居て
下さいますから痛みも苦しみも
神と分け合ふと思へばその楽しみと
嬉しさが胸の中で躍ること思へば
すべからぬ忘れさられるのでしよう。

。主と共にいませば

主と共に有りじと願ふ。 苦しみの内から
主は我れと共に歩むかと一声、二声三声
と声を掛け下されば"我れ主の元の我れの
ものなり 戴きしとん痛みも快樂に ~~分~~
変じ主と共に分けあふ。 樂はかな我が
人生。

妹、吉永知代の召天を通して

大石 祥代（大濠）

「わたしたちの国籍は天にある。そこから、救主、主イエス・キリストのこられるのを、わたしたちは待ち望んでいる。」
ピリピ 三章二十節

「主よ、あなたの大路をわたしに知らせ、あなたの道をおたしに教えてください。」詩篇二十五篇四節

尊い主の御血とご聖名を崇めて感謝します。

忘れもしません八月二十一日の一時四十五分でした。妹、吉永知代は苦しい中にあり、目を閉じていました。私は背中をさすっていました。すると、突然、はつきりした声で、「ここを通って行きなさいって」と言うので、私は驚いて「どなたが」と聞き返しました。するともう一度、はつきりした声で、「イエス様がここを通って行きなさいって」と答え、私は何とも言えない神様の霊の中に包まれた感じで、ワツと泣き伏してしまいました。

しばらくして、私の思いの中に主の大路が浮かび上がってきました。なんと言うか、全身がふるえて言葉にならず、た

だ涙にむせんでいました。すると今度は、妹は目を大きく見開いて、じつと私の左上の方を見つめています。それで何か見えるのと聞きましたら、うなずきながら、可愛らしい声で、「イエス様が、イエス様が」と申しました。私はチラッと時計を見ました。ちょうど二時になっていました。決して忘れないようにと思ったからです。その時の目は病人の目ではなく、とても奇麗でした。美しいとさえ思いました。不思議な輝きの中で私の目に焼きついています。枕元に装置してある血圧計、心肺計が今にも止まるのではないか、不安の中で見つめていましたが、何の変化もなく静かに目を閉じていました。

それから三日目の八月二十四日午前二時に、七十歳と十一ヶ月の生涯を終えて、天に召されました。その時の顔も輝いて見え、苦痛も消えて、安らかに家族の者も平安が与えられて見え、感謝の中に守られております。何という喜びでしょうか。主はこの卑しい者にもお声をかけて下さり、お姿を現して下さいました。何という光栄でしょうか。私の目には見えませんが、恐れ多いことですが、私にも主の気配すら感ぜられました。主は生きておられる。主のご臨在を仰ぎ、感動にむせびました。告別式は八月二十五日福岡大濠公園教会において、

榎本和義牧師の司式にて行われました。その折、このことがお話の中に挿入され、参列された方々も感激しておられました。告別式の後の雰囲気もいつもと違っていました。婦人会の方々も「悲しい事なのにほんとうによかったですね」とイエス様とのお交わりが喜びに変わっていました。このようにして主は天国に招き入れてくださいました。感謝です。

事の始まりは去る四月五日（木）のことでした。妹より電話があり、胃の具合が少し悪いので診断して頂いたところ、肝臓癌の恐れがあるので精密検査をするようにとの事を涙声で伝えてきました。私も頭が真つ白になりましたが、とにかくお祈りしようとみことばが与えられました。イザヤ書四十一章十節でした。「恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもって、あなたをささえる」とのお言葉によって平安が与えられました。

色んな問題がありました。病院のこと、検査のこと、抱えることの出来ないような心配で一杯だったと思います。また、その時は丁度棕櫚の週間に入ったばかりでした。イースターまでの主の受難日と、この苦しいとき、主は私どもの一歩前をお歩きになってくださいました。只只、主にお委ねして祈

るよりほかにありませんでした。「あなたと共にいる」と仰せられた主を信じ祈ることができるとも、これも私共の慰めでした。それに妹が一番気にかかっていたのは受洗していないことでした。私が召されたときには榎本和義先生に告別式の司式をお頼みして、と申しました。私がそれは大丈夫だから、一日も早く癒されるようにお祈りしましょうと言って、一生懸命お祈りしました。心から信じてことができました。色々と問題もありましたが、総て都合よく解決させて頂き、四月末頃より五月にかけて連休のある中で、九大病院にて五月一日に手術の運びとなりました。色々と不安の重なる中で、お祈りの大切さを味わせていただきました。祈れば必ず恐れも消え、平安に保って頂き感謝の日々でした。

一切を主にお委ねしまして、無事手術も終わりました。教会では、牧師先生をはじめ皆様方の篤きお祈りが力強く伝わってきました。病床では毎日聖書を開いて、教会で戴いた聖書の言葉を伝えました。妹は本当に渴いていまして、吸水紙に吸い取られるように一つ一つのお言葉に力が与えられ、慰め励ましをいただいております。術後の抜糸も順調で五月十六日に退院する事ができました。自宅静養の間は食欲も大分出てきて、少しずつ運動をしたり、家事をしたりでしたが、やはり病院の方が楽だからと荒江の方の病院で静養する事に

なりました。背中の痛みは続いていましたが、毎日運動は欠かさず行っていました。八月に入ってから、特に悪い様でもなかったのですが、食欲が落ちた感じがありました。今年の夏は特に暑かったので、その故だと思ったりしました。でも、主を信じて「人にはできないが、神にはできる。神はなんでもできるからである」とほんとうに信じていました。また、妹はよく「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」とのお言葉を、いつも私との合言葉にしていました。そうよ、私達は信じてお救いに与ったのだから、神様のお約束だから信じましょう、と楽しい語らいの一時でもありました。

八月三日は婦人祈祷会でしたので、教会の帰りに病院にやりました。その日は顔色も良く、果物もおいしいと喜んでいました。私も安心いたしました。明日は来なくてもいいかしらと言って帰りましたが、その夜から急変して、もどしたりしたのだそうです。本人より電話で知らされて、驚いて翌日より毎日付き添っていました。牧師先生にもご報告し、お祈りをお願いしました。今までも、何回もお出で頂いておりました。八月二十日に牧師先生より、病床で洗礼式をして頂きました。本人もとても喜んで感謝しますと申していました。妹と手を取り合って喜び合いました。夜になってから

も何回も感謝、感謝と申していたそうです。それから四日目に、冒頭に書いた次第になりました。

主の憐れみは測りがたく、心から信じお委ねした者に尊い慈しみと奇しきみ業を現していただきました。これより以上のもはありませぬ。知代も天上において、主と共にある生活に移されて幸福だと思えます。終わりに牧師先生をはじめ教会の皆様にも懇ろなるお祈りとお見舞いの品を頂戴していただきましたことを厚く御礼申し上げます。また、残されました遺族のために引き続きお祈りの程、宜しくお願い申し上げます。なお、補足ですが、主人の和弘も教会にお導き頂き、励んで居ります。ほんとうにありがとうございました。



命名

大口 和子（前田）

最初に聖書を拝読させていただきます。

詩篇一八篇一、二節です。

『わが力なる主よ、わたしはあなたを愛します。主はわが岩、わが城、わたしを救う者、わが神、わが寄り頼む岩、わが盾、わが救の角、わが高きやぐらです。』

私は息子の力を帝王切開でお産致しました。他の胃腸などの手術でしたら、前の日に知らされて、当日の朝食はなしですが、私の場合はお産のためなので、前の日からのお知らせもなく、当日の朝食もちゃんいただきました。その後、婦長さんがこられました、今から手術をしますといきなり言われまして、私は「イヤです」と言いました。すると、「赤ちゃんが死んでもいいですか!」とガンとしられました。そこで「いいえ、いけません。では、よろしくお願いします。」と言うしかありませんでした。指一本も切った事がない私は怖くてなりませんでした。それから手術着に着替えようとしましたら、讚美歌の三二四番の一番「主イエスは救いを求むるこの身に、ゆたけき恵みをそがせたまえり。いよいよわが主を愛せしめたまえ。」と、八幡バプテスト教会からまるで私

のために、私を励ますために歌われているように、私は何も知らせていませんでしたのに、私は「あつ、讚美歌だ!」と、ベランダから飛び降りて教会に飛び込んでいきたいような感じにさせられました。その讚美の歌声に大変励まされ歌声におくられながら、輸送車で手術室に向かいました。前の方の手術がまだおわっていませんでしたので、すぐ手前の部屋で待たされました。目隠しをされたままで、私は一生懸命に祈りました。「どうか、先生の腕に上よりの力に満たして無事にお産が終りますように」と祈りながら、心の準備を整えさせていただきました。いよいよ私の番になりました、輸送車でまな板ベッドに横付けされまして、さ、こちらのベッドに移ってくださいと言われまして、私は「はい」と言って探りながら、まな板ベッドに移りましたが、先生が「これはおとなしい。小さい子供でしたら、これはお利巧さんだ」といわれるように、たいへんほめてくださいました。神様を知らない皆さんは怖がって、「助けて!!!」と怖がったり、わめいたりするそうです。私は手術は時間できちつとなさいますのに、まな板にのって暴れたりしましたら、公務執行妨害になりかねないと思いますので、言われるままに従いました。先に心の準備をさせていただいておりましたので、当時、有名でいられました大谷部長先生が手術をしてくださいましたの

ですが、学生さんも何人か入ってきまして、腹部麻酔ですの
で、指図をされるのも良く分かります。切られても痛みは全
く感じません。担任の古賀先生に私の上にのしかかっ
つしやられ、遠慮がちにのしかかられましたら、もつとぐう
つとのしかかっつと言われ、ちつとも重さも感じません。そ
のうち子供がやつと出まして、二、三回逆さまにして振られ
ましたら、ギャツと泣き声が聞こえました。そのとき、麻
酔科の先生が「大口さん、男の子です」と励まして下さいま
した。それから全身麻酔をしますから、私について数えて下
さいと言われまして、ようし、これでもと思っていました
が、四つので、あとは全くわからなくなつてしまいました。あ
のように、天国にいけるのでしたら、本当に楽チンですが、
気がつきましたときは、八人部屋の自分のベッドに寝かさ
れておりました。担任の先生が見えて、注射をしますから、手
をだしてといわれましたが、手も口の中もしびれて、やつと
「出らん」と言いましたら、「よし、僕が出してあげよう」と
麻酔を覚ます注射をして下さいました。だんだん麻酔が覚め
ましたら、傷口の痛みが強く感じられて、だまつて我慢する
事ができませんでした。「いたいよ、いたいよ」といいとおし
まして、皆さんを寝させませんでしたので、向つて左端のベ
ッドの方がそんなに痛いのなら、痛み止めの注射をしてもら

つたらと言われまして、痛み止めがあることすらしりませ
んでした私は、すぐに枕もとのボタンを押して、真夜中に先生
をたたき起こして、古賀先生が一時間おきでしたか、忘れま
したが、三回目の注射が終つて、やつとだまつて我慢する事
ができました。生れますまでは、きつと女の子よ、といわれ、
母も赤い花柄の布団を縫つておりまして、女の子だったら、
栄えるという字をとつて、栄子と名前をつけたと思つてお
りましたところが、男の子でしたので、主人の甥たちが皆好
きな名前をつけておりまして、考え付きませんでしたので、
榎本先生にお願い致しようかと相談がまとまりまして、弱
視の私が書きやすいようにと、力という名を先ほどの詩篇一
八篇の一節からつけていただきました。おかげさまで、込み
入つた字でなくて、本当に助かりました。日曜学校へはずつ
と行かせていただきましたけれども、愛媛大学のときも教会
に属しておりましたが、今は礼拝にも集う事ができませんで、
私は力にすぐく渴きを与えてくださいますようにと祈つてお
ります。皆様の陰にあつての厚い厚いお祈りに支えられてお
ります事を深く感謝致しております。今後とも私たち家族の
ために、お祈りのご支援をよろしくお願い致しまして、つた
ないお証しを終らせていただきます。

信仰口上(魂シリーズその二)

正野 真宏(前田)

これは、家族会の席上で口上したものを、ぶどうの木第二十六号に引き続き掲載するものであります。

一 岩の上に家を建てるの巻

東西、東西。信仰口上第三段を申し上げます。

このたびの主題は、マタイによる福音書第七章の例え話から、「岩の上に家を建てるの巻」でござりまする。

この箇所は、幸いな人生の土台は何かを教える伝道集会のテーマであつて、我々信仰に入つた者には、卒業した事項であると思つておりましたところ、決してさにあらず、信仰の根幹に関わる極めて重要な箇所であることが分かつたのであります。

さてお立会い。何が重要であるのかと申し上げますれば、岩の上に家を建てた賢い人とは、即ち、主の御言に全幅に信頼し、信仰が確立して動かない人でありまして、聖書には「雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家を打ち付けても、倒れることはない。岩を土台としているからである」とあります。これは本来あるべき信仰であることは、皆様ご承知の

とおりでありまする。

問題は、砂の上に家を建てた人であります。私は最早そんなことはないと思つておりましたところ、主は「御言以外のものに信頼している人は、その根源に古き自分を置いていゝ」と言われるのであります。否、自分を中心にしているから、任せることができないのです。自分が主人にならなければ承知しないのであります。しかし、主は「自分を当てることほど弱く、危ないものはないぞ。それは砂だ。岩なる私に任せよ」と言われるのであります。

私達は、主に信頼している積りであります。岩の上に建つていゝと考へております。しかし、光に照らされてみると、岩は表面だけで下は砂地ですから、洪水が来るとすぐに流されます。不安になつて、慌てるのです。「なぜだろう。信仰もつて祈つていゝのに、神様はどうしたのだ」と、神様の約束を疑い出します。疑いが生じると、手遅れにならないように早く手を打とうとゴソゴソ動き出すのであります。魂の深いところで、己が働いていゝことに気が付かないのです。文字通り愚かな人になるのでござりまする。

主は己を根こそぎ取り除き、土台全部が岩となるまで委ね切ることを求められます。そのために十字架が建てられたのであります。十字架によりすがつて歩む人こそ、まことに

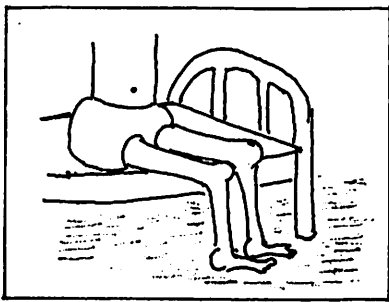
賢き人でござりまする。

さても皆様、信仰は嵐によって明らかになります。ごまかしが効きませぬ。中途半端な生ぬるい信仰、半岩半砂の信仰は役に立ちませぬ。思い切つて、全身全霊を主に明け渡し、主に委ねようではありませんか。さすれば、我が八幡前田教会は「この岩の上にわが教会を建てん」と言われるようになること請け合ひでござりますれば、共々に主の栄光を拝したく、角から角まで、ズ、ズイーツとお願い申し上げ奉るー。

二 廃用症候群の巻

東西、東西、これより信仰口上第四弾「廃用症候群の巻」を申し上げます。

ここに取り出したる一枚の写真、種も仕掛けもありません。さてお立会い、ここに写りたる老人の足をとくとご覧あれ。ああ、親の因果が子に報いたるや、足の形あれども筋肉これなく、すでに歩くことあたわざる哀れな姿となっておりま



する。これ親の因果にあらずして、老化に伴う機能低下により、意欲の減退、甘え心の増長を来たし、閉じこもり状態となりて、テレビの番のみ時を過ごしし成れの果てであります。これを医学的に「廃用症候群」と申しまして、身体を用いざるにより、大腿四頭筋という大事な筋肉の退化に起因いたします。歩かざれば、全身機能は急激に低下し、座るときも出来ず、遂には寝たきり状態、行く末は死に至る恐ろしき様に到ります。

そもそも、用いざれば、持っているものまで取り上げられるということは、聖書の教えるところにして、神様はそのように我々の身体を造っておられるのであります。されば皆様方、このことを肝に銘じ、自らの身体は死ぬまで甘やかさず、「古稀使う」覚悟が肝要かと存じます。

さーてお立会い、しかれどもこれ身体のことのみにあらずして、魂においても真理かと存じます。神が我らに与えし信仰は、用いざれば「霊的廃用症候群」となるのであります。クリスチャンらしき形はあれど、その膝弱りて力なく、祈りの手は下がり、霊的食欲を失って全身やせ細り、自ら立つて御言葉に従う気力なく、いつも牧師に頼っております。それゆえ神は、そのような哀れな状態にならざるよう、愛する者を鞭打ち、訓練されるのであります。すなわち、困難

を与えてその信仰を用いさせ、靈的筋力の向上を図るのであります。

されば、主の訓練とか魂の活動とは、何を言いましうや。

困難を耐えることなるか、はたまた伝道や教会の奉仕に励むことなるか。否、主は言われる「敬度を修行せよ」と。魂は神より与えられしものにして、いのちの源なる神に触れ、その御言葉を慕い求める働きのあります。すなわち、敬度の修行とは、主の呼びかけを聞く訓練、従う修行ではありますまいか。自分の思いを離れ、主の御声に従う時、祈りの手は上がり、弱った膝は強くされ、「信仰から信仰、力から力」へと進むのであります。

かつて我らは、靈的寝たきり状態、否、「はなはだ枯れし骨」にして、命なき者でありしかど、神はかかる者を十字架によりて生ける者となし、立つて歩める者となし給えり。さらに我らをキリストの形とならせたく、一日千秋の思いをもつて待ち給う。しかるに我らは「自分は信仰がない」、「力が無い」、「意志が弱い」とか申して、自ら歩もうとしない怠慢と甘えに毒されてはいますまいか。靈的活動なくば、たちまち「靈的廢用症候群」と成ること請け合ひでございます。

さても皆様、今一度この醜き写真をご覧になり、自らに当てはめ、ここから主の十字架によって主に触れまつる歩みを

させていただく、角から角までズ、ズ、ズイーツと、アツ、お願い奉るー。

三 靈的健康法の巻

東西、東西。さても皆様、世は正に健康ブームでございます。テレビ、新聞雑誌は溢れるばかりに健康情報を流し、人々はこれを血眼になっております。ある人は健康のためならば、死んでも良いと言っておるのであります。

然れども、私は体の健康情報は多くありますが、大事な魂の健康情報が世になきことを悲しむものであります。そこで聖書の中にその情報なきやと探しましたる所、遂にパウロの祈りの中に発見し、ここに皆様に口上申し上げる次第であります。

さて、お立会い。どこの箇所かと申しますれば、コロサイ人への手紙第一章九節以下であります。私はここを「健康への循環システム」と命名しております。

その第一は「あなた方があらゆる靈的な知恵と理解力をもつて神の御旨を深く知り」(九)。これは聖書を読むことと祈ることであります。これは基本中の基本でありまして、神の言によつて生かされる私達は、これなくしては生きることができません。体に譬えれば食欲に当たり、食欲亡き者は死

を迎えるように、まず、私達は神を求め、御言を豊かに蓄えねばなりません。

第二は「主の御心に適った生活をして真に主を喜ばせ、あらゆる良い業を行なって実を結び」(十)。これは実践であります。御言を与えられても、これを実践しなければ、頭でっかちの信仰となり、力とはなりません。体であれば、運動に当たります。任せよと言われれば任せ、捨てよと言われれば捨てなければなりません。私には出来ないに従わないでおりますと、結局歩けなくなりまします。

第三は「神の栄光の勢いに従って賜る全ての力によって強くされ、何事も喜んで耐えかつ忍び」(十一)。これは信仰による力であります。神の御言を求め、これを実行して行くうちに私達の魂は、命と力が与えられて、何事も喜んで耐えかつ忍ぶことができるようになります。つまり、暑さ寒さに耐えられる健康体となるのであります。

霊的健康とは、力に満ちることにほかなりませぬ。健康な魂とされた者は、益々神に対して飢え渴き、神を求めるようになり、そして、神に従うことで、「信仰から信仰、力から力」へ進むことができるのであります。これぞ「健康への循環システム」であります。この一つでも欠けると、循環システムは止まり、かえって逆方向へ流れて、御言を求めること

もできなくなり、魂はやせ細ってくるのであります。

私達の信仰は、自分の願望が叶えられることだけを求めるものであつてはなりません。それは温室育ちともなり、暑さ寒さに耐えられません。神は私達をそんなひ弱な者にしたくありません。「私はどんな境遇にあつても足ることを学んだ」(ピリピ四・十一)パウロのようにしたく願つておられます。そのためには、ただ主に従うのみであります。

さても皆様、以上の霊的健康法を守っていけば、魂が健康となること請け合ひでござりますれば、一人一人がこれを忠実に守り、主を崇める者となりますよう、角から角まで、ズ、ズイーツとお願い申し上げ奉る！。



娘の婚約

小松 南子（前田）

主の憐れみと、恵みのうちに、日々豊かに過ごさせて頂き、感謝いたします。毎年新年の聖言は、私のために主が備えて下さったと感謝して受け留めておりますが、特に昨年は、主が私達親子の祈りに御旨を示して下さいましたとして、感謝致しました。

実は平成十二年の十一月頃でしょうか、娘に結婚のことで祈ってほしいと相談を受けました。

娘の結婚につきましては、長い長い祈りの課題でした。娘が西南女学院の時、先生に結婚問題は十年ぐらい祈るようにと言われたそうです。そこで、「じゃあ、祈ってゆこうね」とそれから毎日の祈りでした。

祈りながら、神様がイサクにリベカを与えられた様に、きつとすばらしい出会いを与えて下さると信じておりました。しかし祈っても祈っても、その時が来ず、気持の動揺が置きはじめました。しかし、「すべてのわざには時がある。…神のなされることは皆その時になつて美しい」「信仰とは望んでいる事から確信し、まだ見ていない事実を確認することである。」「神にはなんでもできないことはありません。」「など、

ただ与えられるみ言葉を信じ、その時を待つておりました。しかし三〇歳も過ぎますと、私の気持はおだやかではなく、娘を責める時もありました。娘は「神様が与えてくださらないのだから、しかたがないじゃないの」と言いますし、お見合いのお話しをいただいても、「どうせ信仰の事で断つても、断られてもいやだから」と申します。ただただ、主により頼んで祈るだけでした。

時には、主よ、どうして祈りに答えて下さらないのですかと、尋ねる時もありました。しかしその時、「主の手は短かろうか」「主は待つていて、恵みをほどこされる」とみ言葉をいただいで、私達が待つている様に、主も待つていて下さるのだと思いました。

それで結婚の相談と聞きました時は、自分の耳を疑うほどでした。主がどんな方を与えて下さったのかと嬉しくて、嬉しくて、「ああ、主よ、感謝します」と言つておりました。しかし話を聞くうちに、自分の願つていたことと、あまりにも違いすぎていました。驚きと嘆きとで、「主よ、どうしてですか。みこころを教えて下さい」と呟いておりました。

しかし娘の気持を思いますと哀れでなりません。そこで、「長い間、信仰もつて祈つて今まで来て、はじめて貴方が結婚したい気持になつたのだから、これが本当に主のみ旨かど

うか祈ってゆこうね。そしてまず榎本先生に御相談して、祈って頂きなさい。」と言っておりました。その夜は主のみ旨を教えて下さい。み言葉を下さいと苦しい祈りでした。そして与えられたみ言葉が「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすればこれらのものはそえて与えられるであろう」でした。み言葉を与えていただいて、娘と二人で祈りながら、それにむかつて歩みはじめました。

それでも、まだまだ気持が揺れ動いておりました。主のみ旨であるかどうかはつきり知りたい、み旨であれば、主に従いますと祈っておりました。そして新しい年を迎えました。

そのみ言葉が、「見よ、今は恵みの時、今は救いの日である。」「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」でした。今は苦しい時であるが、恵みの時であること、また自分の思い、願いを捨てて、自分に死にきる時、主が実をむすばせて下さること、娘が一粒の麦になることを主が求めておられるのだと受け取りました。そして私の気持ち而定まり、すべてが感謝にかかりました。先生の説教を聞いているうちに、自分は信仰を持っているつもりでしたが、自分の信仰はこの世的な信仰であったことを反省させられました。

それから聖会で何度も歌いました霊感賦の三十一番と十三番をいつも歌いつつ、感謝しております。

そして主の恵みにより、また先生はじめ皆様の祈りによって、十二月二十三日に婚約式をさせていただきました。本当にうれしく、ただただ感謝でございます。ありがとうございます。

(平成十三年一月エステル会でのお証しより)

娘の結婚

小松 南子(前田)

このたびの瑞枝の結婚式にあたり、先生ご夫妻はじめ金生先生夫妻、また皆様のお祈りとお力添えを頂き、神様の祝福のうちに無事結婚式を終える事ができました事、心から感謝致します。

昨年十二月二十三日に婚約式をして頂き、祈って日取りを決めさせて頂きました。主の憐れみによって、いちばん良いときに、願っていた通りの場所で、結婚式又披露宴をさせて

頂き、感謝致しました。

日取りが決まりましたからは、ヨハネ福音書二章にイエス様が婚礼の時、水をぶどう酒にかえられて祝福された様に、娘の結婚にあたっていろいろな問題がありますが、なんとか水をぶどう酒に変えて頂きたい、又水を運んだ僕にして頂きたいと祈っております。そして主はあわれんでくださり、ご計画を持って、愛をもって、一つ一つの祈りに答えて祝福して下さいました。その感謝をいくつかに分けて、感謝させて頂きます。

まず婚約式が済んだ後、感謝させて頂いたことでもありませんが、娘の結婚は長い長い祈りの課題でした。先生はじめ野村先生、高木先生も心にかけて下さって、祈って下さいました。私もただみ言葉を信じ、み言葉により頼んで力を与えられ、望みを与えられ、慰めを与えられました。教会で与えられるみ言葉、又聖書を読んで与えられるみ言葉、すべてが娘につながっております。そして今、主は真実なお方であり、愛なるお方であり、恵み豊かな方であり、御計画を持って信じる者に報いて下さる事を知らしめて頂きました。又、私達に忍耐を与えて頂きましたが、主はそれ以上に忍耐して下さった事を知りました。又、今思えば、娘を私達

のそばに長く置いていただいた事がどんなに喜びであり、楽しみであったかと思えます。

第二に、人それぞれに神様の導きがあり、使命がある事を思います。娘二人がおりますが、次女は手のかからない子でした。しかし瑞枝は私が初めての子育てで不安を持っておりましたので、どうしても神経質に育て、また性格的にも気の強い自立心の強い子でした。それだけに祈らずにはおられない子でした。又、教会を離れておりました私を神様は娘の病気を通して教会に引き帰して頂き、信仰を与え、信仰を育て頂きました。又結婚式に主人が挨拶をさせて頂いた時、娘を育てて頂いた、当教会でと言っておりますが、本当に神様によって育てて頂いた事を思います。

あの子にとって大きな転機が三度ありました。

一つはぶどうの木にのせて頂きましたが、進学の時。これも神様の御計画でのことと思えますが、自分の希望の学校に行く事が出来ませんでした。しかし、西南に行った事によって洗礼を受けることが出来ました。

二度目は三十二歳頃でしょうか、いつまでも親がかりではないか一人で生活を始めた時のことです。家を離れたことのない娘にとっては、いろんな経験をし、成長いたし

ました。しかし犬の大好きな娘にとつては、一人でいるのは淋しいらしく、会社でいやなことがあった時は博多駅の井筒屋の屋上の犬売場によく行っていたそうです。そこで一匹の犬と出会い、私達の反対を押し切って買ってしまい、犬との生活がはじまりました。又その犬によって、神様は彼との出会いを与えて頂いたようです。

そして三度目は、二年前のことです。結婚の申込みを受けた時から、悩んだり、苦しんだり、いろいろ戦いはあったと思いますが、それがすべて信仰の土台となって、成長させて頂きました。

三番目に、すべてが関連してくるのですが、前田教会で結婚式をして頂く事が出来た事です。

私の時は、若気のいたりと申しましょか、信仰というのがはつきりしておりませんでしたので、主人と信仰の事ではつきり話し合う事をせずに、主人にすべてを任せてしまいました。次女の時は、結婚式は教会でと、はじめにはつきりお願いしましたが、彼の会社が東京だということと、お仲人さんが会社の役員だという事で横浜でという事になりました。瑞枝は私の気持を良く知っておりました。又自分もどうしても前田教会でと願っておりました。いろいろ妨げはありま

したが、今思えば、このことで信仰をはつきりさせて頂いて、これも主の恵みと感謝しております。又、私共の親族に私が行っている教会がどんなところか見て頂いて、また出席された方々は今まで幾度も結婚式に出席したけれど、今回のが一番心に残りましたと言っておりました。

四番目に、瑞枝が十九年間、教師会に加えて頂いた事です。会社が福岡で、帰りがおそく、皆様にご迷惑をかける事ばかりでしたが、なんとか今までお世話になって、感謝致しております。私も、教師会の日には朝から早く帰れる様にと祈っておりましたが、いつも道中の時間が長く、お話しを聞く時間の方が短い状態でした。しかし本人は教会に行かして頂く事を使命として頑張っておりました。そのおかげで先生方とお交わりが出来、祈って頂いて、信仰を成長させていただいた事と思えます。又結婚の事について、悩みについて、信仰について、いろいろ林さんに相談をさせて頂き、本当に喜んでおりました。ありがとうございました。

本当に主は生きておられます。ただただ感謝でございます。皆様のお祈りに心からお礼申し上げます。

(平成十三年六月 エステル会でお証しより)

詩集「別れの日々」

(脆くはあるが暗くない)より

伊規須 太郎(戸畑)

残像

泰子の姿が次第に薄れてゆく

【拡がりについて】

立体 ↓ 平面 ↓ 上下が縮まる ↓

左右が縮まる ↓ 点となる ↓

点が小さくなる ↓ やがて消滅!

【カラーについて】

総天然色 ↓ 全体がセピア色に ↓

薄茶色 ↓ 次第に薄くなる ↓

霞んでくる ↓ 色が消える ↓

次第に暗くなる ↓ 暗黒となる!

【動きについて】

活発な動き ↓ 緩慢となり ↓

時々止まる ↓ 時々動く ↓

動かなくなる ↓ 見る者を吸引する(ブラックホール)

最後に残るのはブラックホールのみ 宇宙と同じか?

【音について】

すでに完全な静寂となっている

(二〇〇〇年八月二日)

夫婦

◇ある婦人「伊規須さんは『女は目利きになってダメな男はパスして』と言われましたが 私は一人の男をパスしましたうちの旦那です フフフ」

◆伊規須「エッ! そんな……」

◇裁縫店で別の婦人「お一人暮らしと言われるけど身なりもキチンとして……ねえ」

◆伊規須『男やもめにウジが湧く』って言うでしょうだからそうならないように心掛けています……

『女やもめに花が咲く』とも言いますよねえ』

◇その婦人「ああ早くうちの旦那 死なんかなあ」

◆伊規須「そりやイカン」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆
一方わが家では……………

物言えない妻に 語りかけながら夕食介助をしていると
視線を感じた すぐ前の若い寮母さんはチラツチラツと目を

走らせる 左前の若い看護婦さんもジツと私たちを注目する
何とも言えない いくつかしみのまなざしで

「泰子さん いいわねえ」と聞こえてくるようだ

痴呆にならなかつたら こんな夫婦の情は体験できなかつた
だろうと思う 痴呆万歳！

(二〇〇〇年八月七日)

差し入れ

一人暮らしになって 色々な方から

(食物の) 差し入れをいただく

その物ももちろん有り難いが 心がもつと嬉しい

「家族が多いので たくさん作りますから」と言われる

それは事実かも知れないが どんなにたくさん作っても

「伊規須さんに あげよう」という

強い意思がなければ できることではない

それは 私を家族の一員として考えてくださることだ

感謝！

容器のやりくりだつて 相当に頭を使うに違いない

カロリーだつて 考えて頂いているに違いない

コレステロールも 塩分濃度も考えられているだろう

堅いものが噛めないことは 皆さんご存じである

外出の多い私のために いつごろ食べるか考えて

冷却材を入れたり 温め直したりされるといふ

他の人の容器と混じらないようにと

ご自分の名前を書いて下さる方もある

それぞれの容器の置き場所を決めているが 混乱することも

ある 頂くにも頭が要る……嬉しい悩みである

(二〇〇〇年八月七日)

無

五感といえば 目・耳・鼻・舌・皮膚などによる感じだ
泰子は五年前 左目の白内障手術を受けている
専用眼鏡をどこかへやってしまつて よく見えてはいない
最近右目にも白内障が認められた こちらも霞んで

確かめようがないが 耳は聞こえていると思う

しかし 全身的に感覚が低下していることを考えると

聴覚も低下していると思う……嗅覚も同じだ

味覚は低下し オイシイと感じる様子はほとんどない

皮膚の感覚もかなり低下している

筋肉の感覚 骨格の感覚も低下している

ギョツと肩をもんでも 感じないし

脇の下をクスグツでも 知らん顔

(厳冬に) 冷たい手を首筋にあてても

キヤーツと言うどころか 動こうともしない

ひどく内出血するほど膝をこねても 痛がるふうはない

昔もなく今もなく 将来もない

世界も国も社会もなく 家もなく家族もなく夫もない

痛いもカユイもなく苦も楽もない 悲しみも慰めもない
朝も夜もなく 生もなく死もない 無い無いづくし

(二〇〇〇年八月七日)

いのり

あなたにお会いしたくて 一步一步大地を踏みしめて
ここまで参りました 礼拝に出席でき感謝いたします
今日でなくては聞けないあなたのお言葉を聞かせて下さい

私はいま体が弱り 転びやすくて困っておりますが

詩篇に「苦しみに会った事は私によい事です」とあります

近いうちに喜びの日が来ることと信じます

最近は一人で行動できず 家族にも教会員にもご迷惑をかけ

私はいつ死んでもよいのですが 何かみ旨があるのでしよう

いまだに生かされております……最近

あまりに転びやすいので 毎日のリハビリを指示され

水曜日の祈祷会に出られなくなりました

家族友人の救いの為に 格別泰子先生の平安の為に祈ります

牧師先生はいま大変と思いますが 暗くなくて助かります
どうか長生きさせて下さるよう あなたが助けて下さい
私はあなたから生かされております この事をいつも覚え
復活の主を見上げて 信仰から信仰へ進ませて下さい

(注) 病を押して礼拝だけを生きがいに励まれる
Kさんの祈りには 一同が大きな感動を覚える

(二〇〇〇年一〇月一六日)

障害鳩

切手を買おうと T商店にいった

出入り口のまん前で 一羽の鳩がエサを拾っていた

まるで粉のようにこまかいエサ! 嘴が太く見えるほど

それがコビリついている あれは何だろうと見つめていると

アツ指が欠けている!……と気付いた

変形した足指が左に三本 右には二本……

エサを啄みながら ときどき首をかしげて私を見上げるが

動きはタドタドしい

彼を驚かさないように 遠くから店の人に声をかけた

「そうなんです それでいつもエサをやっているんです」

「今日はもう十分食べましたからいいです お入り下さい」

と言う……鳩に「ゴメンね」と言いながら

店に近付くと 彼はヒラリと飛び立った

店の人は私の顔を見て ニコツとした

私も笑い返した

この人は身内に障害者を抱えているのかも知れない

(障害者本人には決して言えないが) 自分にとって

障害とは決して悪いものではないと思った

(二〇〇〇年一〇月一六日)

組み木

カスガイもなし

鉄釘もなし

組み木細工の逸品

それが私たち(夫婦)ではなかるうか

二人を結び付けているのは 「痴呆様々」だと思う

どうかしたら……

それは夫婦の間を引き裂き

家族・兄弟姉妹を離反させ

人を不幸に陥れるとして

恐れられ 忌み嫌われ 恥じられ

あるいは隠され 世をまどわした

ある人は 痴呆者を助手席にのせて

みずからも海に飛び込み

またある人は 妻の首をしめた！

(二〇〇〇年一〇月一六日)

幻

ある日の夕方 混雑する某スーパーのレジ付近のこと

なぜかこの時間 高齢者の姿が見えない

客も店員も 若い人ばかりで熱気が発散している

それをじっと見ているうちに……フト

皆さんの顔が 高齢者の顔に見えてきた

シワがより髪は白く 背筋は曲がり足もとはフラついている
みんなすぐこうなる……数十年なんて夢の間だと思う

昔どこかの高僧は「シヤレコウベが歩いている」と言ったが
シヤレコウベになる前に 十分に老いる
姿カタチも変るが 何より命のシステム(脳)が老化する

この人たちは世界一長寿国の主役だ

「ご苦労さん しっかり勉強して 高齢社会を乗りきって
下さい そのころ私たちはもういませんから よろしくね」
と心の中で言う

いま老人ホームに入っている人たちも

数十年前には こういう姿だったに違いない

急に変れば驚くが ジワツと変るから気付かない

いまも歯車は 音もなく しかし確実に回っている

(二〇〇〇年一〇月二六日)

嗚咽

三宅島の火山活動は長引き
ついに九月一日 一部の警備要員（六百人）を除き
全島避難と決まった……その夕

（東京）竹芝棧橋に着いた連絡船から
続々と降りてくる避難民の一人は
「あの雄山が崩れてゆくのをみると……」と
涙ぐんで声に詰まってしまった

火山島の宿命と分かっている
住み慣れた土地を離れることは
どんなにツライ事だろうと思う
その思いは 私の思いにも通ずるものがある

四十年暮らし慣れた泰子は 無残に崩れ去ってゆく
本人は自覚できないから ハッピーかも知れないが
見るのはツライ……そして
いつまでも そこにとどまる事はできない

三宅島民は いつかは戻れるだろうが
私は戻ることができない しかし悲しんでいる訳ではない
（二〇〇〇年一〇月二六日）

百面相

失語症に二種類あるそうだが 泰子はどちらも駄目
ウンともスンとも言わない それでも一生懸命呼びかけるが
言葉よりも表情に反応するような気がする

A マユの上げ下げ

B マブタの開閉（目をつむる、あける）

C 目鼻の間にシワ（クシヤクシヤの顔にするかしないか）

D ホホエミ顔にするか、しないか（他の部分も当然動く）

E 口を大きく開閉する（ワーオとやるかやらないか）

F 唇を突き出す（ヒョットコにするかしないか）

G 舌をべーと出すか出さないか

$2 \times 2 \times 2 \times 2 \times 2 \times 2 \times 2 = 128$

百面相とはよく言ったものである ちよつと表情が動いても
夫と分かってではないようだ……近くで動く
ピンクの服を目で追うが 寮母さんを覚えている訳ではない

手を近付けると すこし口を開けてヒョットコになる
いまはまだ反応するが 進行して行くのは避けられない
脇の下をグリグリしても感じない 首筋に冷たい手をあてて
も無表情：感覚の大きさが相当障害されているようだ
体内の自律神経は大丈夫だろうか？

(二〇〇〇年二月五日)

そば

大晦日の夕食には (年越し) そばが出された
年末年始に (泰子を) 外泊させない代わりに
私は毎日ホームに行つて 夕食介助をした

その日は (メニューの書いてある) 白板を見なかった
お膳が配られたとき 「なるほどホームもそうか」
と思う反面 「あ これは困った」 と思った
麺類の主食は初めてだったからである

泰子は箸を持たず 食器も持てない
エプロンの下で モジモジと僅かに手を動かすのみ

私がスプーンで 少しずつ口に運ぶが

口の開け方も怪しい (なかなか大口を開けない)

だから ちょっと開けたときを見計らつて

サツと口に入れる……彼女の腿は小刻みに震えている

適当な形・分量のツルリとした食塊を作るのが理想だが

そばはサラリとして長い！ ウーン？ あそうだ

井の縁にスプーンを押しつけてソバを短く切つてしまつた

こうして オツユの実を食べさせる要領で口に流し込み

なんとか終る事ができた ハラハラしながら一つ勉強した

(二〇〇〇年二月三一日)

演奏

私は一人ふた役か三役である

司会者・演奏者・説教者……

司会はひとに頼むこともできるが

演奏者は 泰子ができなくなつて以来 (この数年)

主に私が自動演奏器 (奏楽コンピュータ) を操作している

初期の機種は メモリーが大きくなかつたので

機敏な演奏ができず (オルガンに比べて) 不自然だった

泰子が健在だった頃から 演奏器は持っており

メモリーの大きいものが発売されたとき

オプションでいろいろな歌集のプログラムを追加して

これ一台という 特注の機械を作った

しかし当初は ごく限られた時しか使わなかった

メーカーも「オルガニストがおられる時は使わないで下さい」

と言っていた……さて 集会中に乗ってきて

喜んで力一杯に歌っていると 自分も会衆のような気になる

それはそれで大変結構なのだが オット私は演奏者でもある

テンポ・ポリューム・タイミング・反復・終了操作をはじめ

コンピュータの無機質な演奏と 会衆の慣行との微妙な調整

など大変……しかし責任を感じることはよいことだ

(二〇〇一年一月一二日)



はじめに3Kと言われたのは

「キツイ」「キタナイ」「キケン」だったと思う

そういう仕事は 日本人がやりたがらないので

外国人(労働者)にお願いする……という話だった

その後 女性が結婚相手に望むのは 三高つまり

「高身長」「高学歴」「高収入」であるとされた

これも3Kである

最近 ある女性が 介護中の実母を

「きたない」「くさい」「聞きわけがない」と言い

年を取るにも 上手下手がある と言った

自分が年をとったら

「きれいに」「かわいく」「かっこよく」ありたいと言った

そこで 私は提案したい……というより

いま現在 私は次のような3Kを生きている

◆暗くない

◆くたばらない

◆苦勞じゃない

衰えても倒れても 死ぬまでは生きている……

今日は泰子の六九歳の誕生日……痴呆の恩恵を深く思った

(二〇〇一年二月六日)

鰥 夫(やもめ)

東山動物園(名古屋)にいたカバの「重吉」が

老衰の為に死んだ……と報じられた

国内最高齢の五三歳 人間でいえば百歳を越えるという

彼は一九五四年に嫁を迎え 四〇年間に一九頭の親となった

国内の動物園にいる五三頭の 六割は彼らの子孫にあたる

彼の妻「福子」は 四年前の夏に死亡したから

彼の鰥夫だった期間は四年たらず……動物の世界でも

「男(オス)は三年」というのがあるのだろうか?

私は満四年をだいぶ過ぎた 元気がまだ残っているうちは

「先には死なれない 泰子の始末をして」と思っていたが

自分の体が弱って来ると 「あまり長く生きないで……」

と心ひそかに願うようになった

しかし何らかの手出しをしたり 誰かに何か頼もうと

思っている訳ではない……命は厳かなもので

決して人の手の内にはないのだから……ただ

「耐えられないような試練に会わせられない活ける神」

に向かつて憐れみを乞う……これは決して空鉄砲ではない

(二〇〇一年六月三日)

ぼけ日記

「ぼけゆく者」あるいは「死にゆく者」の日記を

書いてみたい というのは 私のかねてからの願いだった

このたび家族会の行事で アルツハイマー病患者の手記

「私が壊れる瞬間」(注)の朗読会が行われる事になった

準備会で 泰子の遺した日記が話題になった

彼女は 在宅介護が限界に達して緊急入院する五日前まで

日記を書いた 最後の一年は「感謝感謝ありがとう」という

言葉以外は全く見当たらなかった……遡ると

五・六年前からチラホラとマダラ状態が見え始め

次第に文章が乱れ 語彙が乏しくなってゆく…そして
二年前で残っていた言葉や「太郎」という言葉も
次第に 姿を消してしまふ

その過程で ぼけゆく様が 本人によって記録されているの
ではないか……という訳である

夫婦といえども相手の日記を見ることはなかったし

無闇に公表する事ははばかられるが 可能な限り協力した

私自身驚いたのは「太郎」「太郎」が沢山出てくる事だった

(注) LIVING IN THE LABYRINTH by Diana Friel McGowin

(二〇〇一年六月五日)

K の 形

PPKのKの話である……しかし私の心は暗くない

人は死なない訳にはいかない それがYYKかPPKか

分からないが 死ぬ事だけは確かである

私も初めは逞しかった 痴呆は神様の賜物と想っていた

それは今でも変わらないが 肉体には限界があると知った

「男は三年」と言うのを笑えなくなった 最近いろいろな状
況が出てきた事は この詩集にも幾つか書いた

新聞写真がたくさんのドットから成るように

私のKの形が次第に見えてきたように思う

フランスの諺(注)も平気 私は正面から見つめている

自分がそうだからといって他人には慎重でなければならぬ

(注) 「太陽と死とは見つめることができない」

(二〇〇一年七月一〇日)

尾 根 道

テレビニュースの真ん中あたりで 一休みがある

画面で自然の風景などを流しながら 奇麗な音楽が約一〇秒

ちよつとした心遣いである……何気なく見ていると

高い位置のカメラが どこかの尾根の道を俯瞰していた

……と 急にそれが 九重の登山道に見えてきた

登山口から三・四時間 山頂に向かうあの道だ!

大勢の仲間と一緒にだったこともあれば 二・三人のことも

泰子と二人だけのこともあった 回数もかなりあったと思う

あそこは傾斜もゆるく そうキツイ道ではないから
何やかや話しながら 息をはずませてサッサと歩いた
帰途すがらもり越えの上り坂で足を痙攣させ
しやがみ込んだこともあった その時Eさんから
杖を買ってもらった あの峠の茶店はもう無い

………ぼんやり考えていると

Hアナウンサーが もうしやべり始めていた
その間わずか数秒 いやもつと短かったかも知れない
人間の頭とは ずいぶんいろいろな事を考えるものだ

しかしそれは現実と繋がっていない 過ぎ去った風景だった

溢れる

ある国語事典を引くと「あふれる」……

「収まりきらなくなつて一部が外に出る」……とあった
聖書のお言葉に 次のようなものがあつた

「人は量をよくし押し入れ揺すり入れ溢るるまでに……」

有り難うございます 有り難うございます 有り難うござい
ます………私はいったいどこにいるのだろうか？！

ここは天国に違いない……死んだあとのことじやなく
遠い雲の上のことでもなく 特別の金ピカ御殿でもなく

今がそうなのだと思う 物も嬉しいが皆さんの心が嬉しい
買い物に行くと とんでもないオマケやらプレゼント！

思わぬところから 差し入れまた差し入れて食べきれない！
一汁一菜どころか 今晩は十菜になつてしまった！

一口食べてはゴクリ 感涙・謝涙・嬉涙を飲んでいると
ピンポン（チャイム）ワーツまた（喚声）ワーン（泣き声）

泣きながら食べては消化によくない と思うがとまらない

歩行器にゴミ袋を積んで出ると あつちからもこつちからも
駆け寄ってくれる……ありがとう ありがとうございます

規定よりも 個々の実情に応じて助け合いたいと思います

（二〇〇一年九月一五日）

家庭内事故

医者が「寝たきりになる原因の一位は何だと思えますか」という。「さあ家庭内事故ですか」と答えた。なぜならそれを注意したいような雰囲気だったからである。正解は脳卒中だった。「なるほど」。次が家庭内事故だった。

高い所から転落するとか、段差に躓いて転ぶとか、それで手足を挫きあるいは骨折する。入院して短期間でも寝付くともう起きられない……これが典型的なパターンらしい。

私は今はまだ、そう簡単に躓いて転ぶとは思わないが、それより危険なことがある。左手にお皿、右手にナイフを持ってヨロヨロと歩きツルリと滑る。「ア危ない！」

「これで倒れてどこかをグサツとやったら、新聞に『介護に疲れて自殺未遂』なんて書かれるかも知れない」

昨年？居眠り運転で追突事故を起こしたとき、交通警察官はスラスラと勝手に調書を書いた。

「老人ホームの帰途、妻の痴呆を嘆き、どうしたものかと思いついているうちに、疲れ果てて眠り込みました」

「これで間違っていないなかったら捺印してください」と言った。そんな事は考えていなかったが、事実関係は正しかった。

(二〇〇一年九月一七日)

終局

ホームからの連絡。「原因不明の発熱があり、いったんは下熱したが薬を止めたらまた熱が出ています……については囑託医がご家族にお話ししたいと言っています」……と。

医師はCT写真をさしながら、若年性アルツハイマーが終局を迎えようとしていることを語った……最近

嚥下や接食障害（口だめ）などがバラバラに出ています。百歳人にも見られないほど脳の萎縮が進んでいます。

末期アルツハイマーの典型的な経過です……生命活動の基本バランスをとる視床下部も萎縮しています。

運動野も目立って萎縮しており、今後手足の動きはますます悪化し硬縮がおこるでしょう。嚥下や排便は困難を増します。特に嚥下がどうなるかが問題。対策は（↓経管・胃瘻？）

【伊規須】（関連して……北欧の社会的常識について）

(どこから先を延命技術として断るべきか?)

(延命技術が常識化し高度化することについて)

いつ事態が急変(血圧の低下等)するかも知れませんが
遠からず重い決断をしなければならない時が来るでしょう
ご主人がご不自由ならなるべく早めにお知らせするように
しましょう (よろしくお願いします)

(二〇〇一年一〇月二六日)

結婚記念日

ヘルパーさんが掃除をしなくても 家の中が片付く!

どこからか 陶器の小さな「めおとピナ」が出てきた

ちようど四二回目の結婚記念日だった 当時の平均から見ても

私たちの結婚は決して早くはなかったと思う

私が三四歳 彼女は二八歳だった……その前

約十年間かなり近くで生活しながら 全く知らん顔だった

結婚後 大した波乱はなかったが いま振り返ると

一つ気になる事はあった……しかしそれも

もう過ぎ去ったこと ただ貴重な体験として勉強にはなった

高さ数センチの 雌ピナは高く両手を挙げており

万歳とも見えるし 雌ピナを保護しているようにも見える

雌ピナは両タモトを前で合わせ 扇子を持って ちよつと

口元を覆っている……

私たちのようでもあるし そうでないようでもある

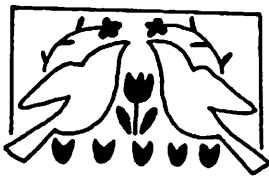
時間もたち記憶力も減退して 何もかも思い出せなくなった

流れ去ったものは帰らない これでもいいのかも知れない

ジュース缶の上に接着剤を付けて ヒナたちを並べた

全てはデータベースに入っており 操作は自在に行われる

(二〇〇一年一〇月二九日)



我が思い出（移動編二）

鈴木 一幹（前田）

一、門司港に入港

翌朝船は汽笛を合図に入港停船し、前田中隊長殿より「当船はただ今門司港に入港した。今後の予定は、明日、別の船が到着し、その船に乗り換えて、いよいよ南方に向け出発の予定である。朝食を終えたら砲・弾薬・糧秣等を、この船から陸揚げし、次の船が入港してから、その船に再び積み込むことになっている。」との説明がありました。

一刻も早く甲板に上がり、久し振りの門司港を見たい気持ちが先に立ち、そわそわしていました。朝食後、中隊長殿より「第三班と第四班は船倉での搬出作業、第一班と第二班は上陸して船から荷受作業を行う。各班長の指揮に従い作業開始」と命令がありました。

第一班と第二班の兵は各班長の指示に従って、魚網を伝って甲板上に登って行きました。他の部隊の兵も、我先にと登って、見る見る内に船内の人が減ってきました。

我が第四班は、佐藤班長殿の指示により砲手班は先ず甲板上の八門の砲を先に吊り下ろす作業を行い、これが完了後、

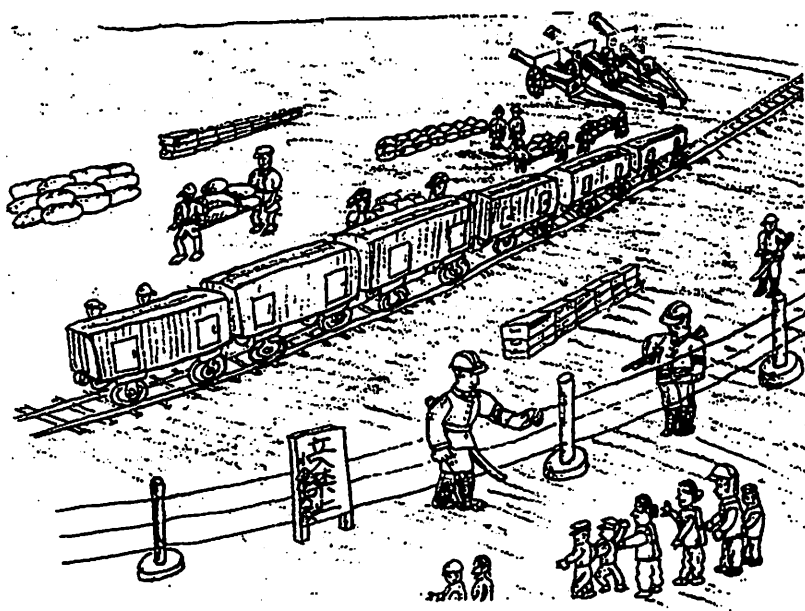
船倉に降りて行き他の兵に合流することになりました。

我等砲手班の一行は、最後に魚網を登り、砲の場所に行きました。クレーンが回ってくるまで、時間があつたので、やつと船上から周囲の景色を見ることが出来ました。久し振りに見る故国の山々や、接岸している岸壁と周辺の建物を眺めて、着いている場所が門司の税関岸壁だと判りました。

岸壁の上には船から降ろされる荷物を受け取るための兵達があひしめき合い、その後方の駅側の道路沿いには、「立入禁止」と書かれた札の下がったロープが張られ、詰めかけている市民が中に入れぬように憲兵が立っていました。

学校が冬休みのためか、ロープぎわには子供達が多く集まり、その後ろに婦人や老人の姿も見え、我々が乗っている船の様子をじつと眺め、この冬の寒い時（一二月）に夏服姿で、どこに行くのだろうかと言った、げげんそうな顔で、我々の動きを見守っているようでした。

曇り空から小雪まじりの霰が降ってきました。やがて我々の処にクレーンが回って来たので、我々は砲に掛けているロープをクレーンのワイヤー先に付いているフックに引っかけました。クレーンはガリガリと大きな音を立てて砲を吊り上げ、甲板上から岸壁に吊り下ろしてゆきました。下で待っている兵達がこれを受け取り、フックからロープをはずしまし



た。この作業を次々に行い、寒さも忘れ、甲板上の八門の砲の陸揚げを終え、引き続き船底での作業に向かいました。

船底では既に御者班の兵達が懸命に作業中で、丁度四基のクレーンで、馬を吊り上げるところで、我々もこの作業に参

加しました。厚い布の四角にロープの付いた吊り具を馬の腹部に当て、ロープの端をワイヤーロープ先に付いている「フック」に掛け「よし」と手を上げ合図をすると、クレーンが吊り上げ、宙に浮いた馬は驚いて足を動かし、暴れるやら、嘶いなくやら、馬を押さえて腹に吊り布を当てるだけでも大騒ぎで、一頭に十人も兵達が手伝うほどでした。こうして約百頭近い馬の搬出が終わり、一息つく間もなく、次は弾薬・馬糧を搬出し、そのほか小銃弾・機銃弾・手榴弾等、他部隊の分も搬出しました。

船内は比較的暖かく搬出作業もはかどりましたが、岸壁の荷受作業の兵達は曇みぞれが降る中を夏服姿で、さぞや寒かったことと思いました。日暮れの頃やつと夕食となり、船倉の壁の明るい電灯の下、残っている弾薬箱に腰掛けて食べました。早く上陸したいな、と言う気持ちに駆られました。

夜間作業が終わったのは夜九時過ぎでした。船倉の荷物も全部無くなり、外で作業していた兵達も皆再び乗船して来ました。全員が一夜をこの船内で過ごしました。

一夜が明け、点呼、朝食後全員は手荷物を携行して下船しました。この船は我々が下船後再び釜山港に引返すとのことでした。岸壁で中隊全員整列し、中隊長殿より、本日の行動計画と作業分担の説明がありました。その間我々が乗って来

た船は、汽笛を合図に静かに岸壁を離れました。

昨日まで降っていた霰あられも止み、門司の山々は白く薄化粧をしていました。少し北風は吹いてはいましたが、日中は薄日もさし、岸壁での作業も割にはかどっていました。

砲手班の作業は、引き込み線に停車している貨車（多分、小倉市城野にある小倉陸軍補給廠ほきゅうじょうから運ばれてきたものだろう。）から砲の弾薬箱（一箱中に四発入り、約八十キログラム）を背負って岸壁まで運ぶ作業でした。

丁度満州での馬糞捨て作業を思い出し、六〇キログラムのカマスを担いで馬糞街道を歩いた頃を思い出しました。

貨車上には数人の古兵殿が居て、貨車に積んである弾薬箱を二人がかりで持ち上げ、我々が後ろ向きで背中を差し出すと、ずしりと箱を背中に乗せられました。途中で落とさぬように岸壁まで、よちよちと歩くと、降ろす場所にも古兵殿達が待ち受けて、これも二人係で受け取り岸壁上に積み重ねていました。この作業を何回も繰り返し、岸壁の端はみるみる内に弾薬箱が山積みになりました。

丁度正午頃、岸壁に大型貨物船が次々に接岸しました。

我々の正面に停泊した船には船腹に白ペンキで、第一六多門丸と書いてありました。またその一つ前の船には第十四多門丸と書かれていました。



我が中隊が乗る船は正面に停泊している第一六多門丸のことでした。

「昼食をせよ」とのことで、岸壁に積まれた弾薬箱に腰掛けて弁当を食べているとき、横を通行中の数人の他中隊の兵

の一人から「おお、鈴木さん、鈴木さんやないですか」と私に声がかかりました。顔を見ると、行橋駅で出征する時に一緒だった同駅前にある靴屋の息子の杉本君でした。私は「おお、杉本さん、久しぶりでしたね、お元気でしたか」と言うのと、「はい、ありがとう、今体調をこわして入室しているが、そのお陰で、さつき両親に面会できました。お宅の方も多分会いに来られているのではないですかね。これ残り物ですが、母が作ってくれた『おはぎ』が少し入っています、食べてください。」と言って紙袋を渡され「私は今第一大隊第二中隊に居り、乗る船は第一四多門丸です。ではお元気で。現地に着いたらまた会いましょう。」と言って急ぎ足で立ち去って行きました。家の者が来ているのであれば、是非一目で良いから会いたいと思う気持ちはあれど、作業中で勝手に場所を離れることもできず、外での弾薬運搬作業が終われば、引き続き船内の荷受作業となるので、船底に入らねばならず、あきらめるよりほかはありませんでした。（出航後、彼の乗った第一四多門丸が途中敵の魚雷攻撃を受けて撃沈され、戦死されたようとは思っていませんでした。）

後で船員に聞いた話では、今度我々が乗る船は、日本郵船の徴用船で、この船員も船と共に軍属として徴用されているのだとのことでした。

この船は石炭焚きの三千トン級貨物船で、徴用前までは、横浜からフィリピンに軍需物資を運び、帰りには、バナナ、砂糖、生ゴム等を積んで帰っていたとのことでした。

午後から我々は再び船内に入り、クレーンで吊り降ろされる馬を始め、弾薬や物資を船底で受け取り、所定の場所に配置する作業を行いました。貨物搬入の全作業を完了したのは午後五時頃でした。

ついに家の者に逢う機会もなく、かりに来ていたとしても、立入禁止の縄張りに、憲兵が見張りをしていたのでは、到底不可能だったことだろうと思いました。陸上での作業の兵も皆乗船し、人員点呼がありました。

しばらくしてドラと汽笛が鳴り、船が静かに動き出しました。

全員が甲板上に立ち並び、いよいよこれが最後の故郷（故国）の見納めかと、門司の家並みや、後ろの山並みを眺めました。

船はゆつくりと、静かに関門海峡を西進し、風師山かぜしやまから戸ノ上山が見えてきました。海岸の家々からは灯火が見え、海岸線を走る西鉄電車が見えますが、窓は全部錠戸が閉ざされています。海岸線を眺めても全く人影は見えません。防諜ぼうちやく上とは言え、見送ってくれる人もなく、全員が無言のまま立

ちつくしていました。日暮れ近くに船は幾分速力を上げ、陸からも遠くなり、今まで薄青色の海水も急に真青に変わり、いよいよ外海に出た頃、対潜監視兵（航海中、甲板上にいて、敵潜水艦を監視する役目の兵）を甲板に残し、他は全員船内勤務に入りました。この監視兵は各中隊から約十名ずつ、一回の勤務時間は約二時間の交代制で、私は夜九時から十一時の間とのことでした。私は船内に入る前に甲板から船列を眺めると、当船団は六隻が二列に並ぶ十二隻の船団で、その護衛として海軍の駆逐艦が先頭に一隻、中程の両横に各一隻計三隻が随行していました。

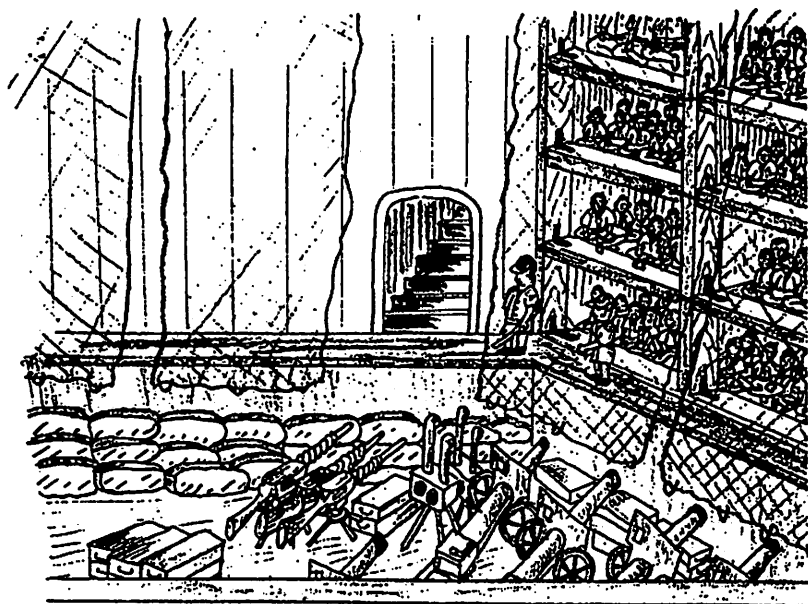
我々はまだ行先も知らされず、ただ南方方面に行くという事実をふまえ、不安と心細さをじつと堪え、各自静かに座っていました。この頃から船は上下、左右に、かなり大きく揺れだしました。

二、兵舎は鶏小屋

この船は貨物船のため、十数人の船員の部屋以外には客室等はなく、我々兵二千人を収容するために、丁度養鶏所の鶏小屋のように船槽に木材で五階建の棧敷が組み立てられ、上下の床と床との高さは約一・五メートルの間隔で、板張りの

床にはゴザが敷かれてありました。従って我々は床上を立つて歩けず、四つんばいに、はつていかねばならず、またあくらをかいて、やつと頭がつかえずに座れる程度で、全員そろくと鮪詰め同然でした。ただ、いつも幾人かの勤務兵（馬車当番、砲廠当番、不寝番、対潜監視当番等）が席を空けるため、幾分ゆとりがある程度でした。

船が大きく揺れるたびに「ギー、メリメリ」と音がして、今にも上の床が崩れ落ちそうな、潰れるのではないだろうか、落ち着いては居られぬ状態でした。我等野砲中隊の居場所、五階建ての内の一番下で、そのすぐ下の船底には、砲や馬や、弾薬箱、馬糧等が積み込まれ、数日経過した頃から、馬の糞尿の臭いが充満し、窒息するのではないかと思われる有様でした。また各階への往来や、船底に、或いは甲板上に行くには、階段は中央部に一カ所あるだけでした。しかもその階段は狭く、食事当番兵が食缶の運搬等以外は使用禁止のため、甲板上から船底まで棧敷の前面に吊り下げられている魚網を伝って上下していました。



三、便所をするのも命がけ

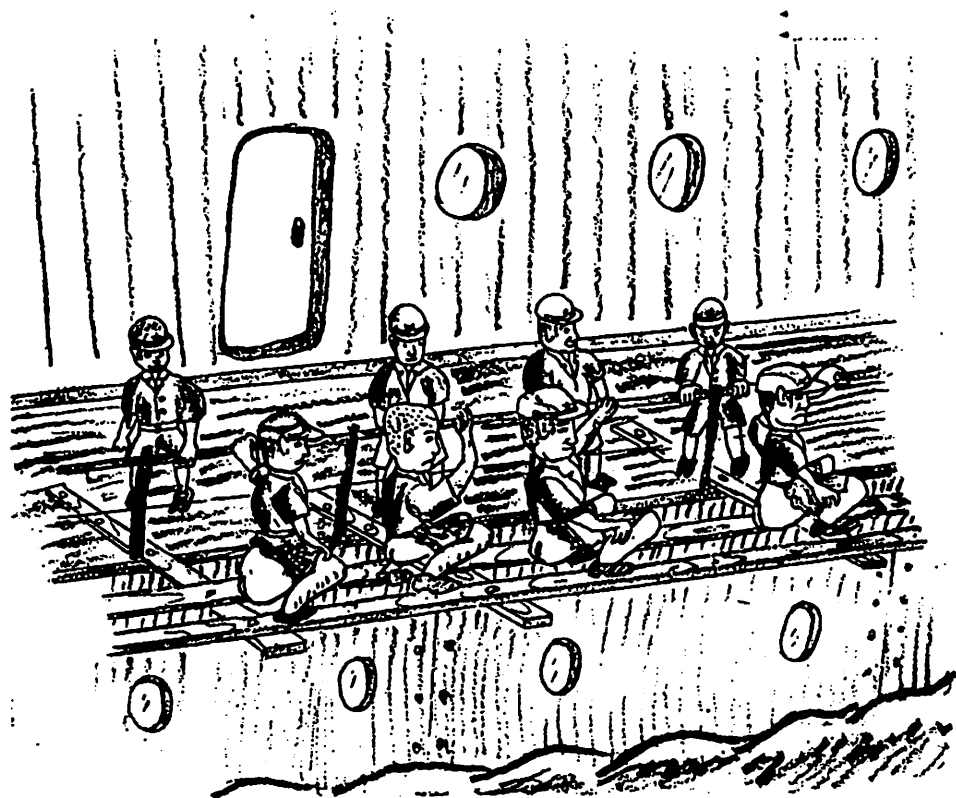
船内で、我々が一番困ったのは便所で、船内の便所は船員便所が一カ所だけで、船員以外は使用禁止になっていました。

従って臨時に甲板上に便所が作られていました。

これは甲板から海面上に突き出して、材木組の仮設便所が左舷と右舷とに各十人分ずつ設けられていました。小便の時は、甲板上の縁取りロープを握って海面に向かって放尿すればよいが、大きい方は、ロープをまたぎ、海面に身体からだを乗り出し、仮設便所の板の上に乗る、海に落ちないように右手でしっかりとロープを握りしめ、左手でズボンを下げて用を足さなければならず、波の大きなうねりで船が揺れ、また風雨の激しい時など、全身ずぶぬれになる等大変でした。風の強い時等、拭いた紙が舞い上がり、兵等が座っている船内に落ちてくる始末でした。

四、対監視（敵の潜水艦を探すこと）

対潜監視要員を命ぜられたのは夜八時三十分頃でした。私達約十名の勤務時間は、夜九時から十一時までの二時間でした。布施伍長殿の指揮しきか下に入り、戦友の川上君を含め一同、帯剣を腰に付け前面に垂れ下がった魚網にぶら下げられている救命具を着用しました。（救命具と言っても布製ではなく、「孟宗竹」もうそうだけの、長さ五十センチ程に切った竹を前側に五本、後ろ側に五本を紐で繋いであった。）そして布施班長殿の引率で、一斉に魚網をよじ登って行きました。



体に帯剣を付け、雑のうをかるっている上に、孟宗竹の救命具を着用しているので、地下足袋ばきとはいえ、魚網をよじ登るのは大変で、体の重みで足が上にあがり、なかなか思うように早くは登れませんでした。もし敵潜水艦の攻撃を受けたとしたら、非常事態になったら、各隊毎に全員が竹の救命具を取り付け、この魚網を登らねばならず、しかも一度に二千人もの兵隊が、我先にと、魚網に取り付くであろうことを想像すると、ぞっとするのを禁じ得ませんでした。大混乱が起こるのではなからうかと思いました。

しかも我が中隊は船底に近い一階になっているので、上まで登り付いた時には、息切れしそうでした。我々の任務場所は右舷の甲板上の救命イカダが積み上げである横で、海に向かって横一列に「おりしけ」をして座りました。(おりしけとは、左足を曲げて立て、右足は地面に付けて座る姿勢)前任の監視兵と交代して任務に就きました。甲板上は少し寒く、空は少し薄曇りで時々月が雲間から顔を見せる冬空でした。我が船の右横に並んでいる船(第一四多門丸)も薄闇の中に、ぼんやりと霞み、船影も黒ずんで見えていました。風は強くなかったが、波が高く、並んで進んでいる第一四多門丸が時々見えなくなるほどでした。

船のエンジン音が「ゴトゴトツ」と響く外には物音一つな

く、甲板上は静まりかえっていました。

私は指示の通り海面を探視し、万一敵潜水艦や、魚雷の航跡等を発見したときは、大声で「敵潜水艦〇〇メートル先に発見」等と大声で司令に知らせることになっていました。

夜十時を過ぎた頃、半袖の上衣では、さすがに寒さが身にしみ、皆身体がふるえていました。

横に居る川上君が小便のため立ち上がり、甲板の柵さくとロープを握って海面に向かって放尿しました。これを機に、他の兵達も交互に放尿し始めました。司令が「船が大きく揺れているので、海に落ちぬよう注意せよ」と声を掛けていました。夜が更けて静けさの中に不気味さを感じながら、各自が海面を見すえ、一秒毎に目の位置を右から左へと移し、二分位してから今度は左から右へ移動させていきました。

真正面に並んでいる第一四多門丸は灯火管制下であり、一点の灯も見えず、我が船同様エンジン音を響かせ、船に当たる大波の白い波頭を残しながら静かに一路南進していました。

五、第一四多門丸撃沈さる

その時右舷の我々監視班の後方（船尾側）に位置している他部隊の監視兵が大声で「船の後方二十メートルの位置に魚

雷の通過跡発見」との連呼が起りました。我々も一斉に船尾の方の海面を見ると、船尾の後方約二十メートルくらいの所に白い泡状の魚雷の通過跡が見えました。その瞬間に船内の非常ベルと汽笛が断続的に鳴り出しました。

船は急に進路を左に変えたため、横に並んで進んでいる第一四多門丸は右手後ろの方向に位置が変わって見えませんでした。

海面上は月明かりで、魚雷の航跡が、かすかに見えました。船内からは続々と救命具を付けた兵達が、魚網を伝って我先にと甲板上に出てきました。私は魚雷の白い航跡を見て、その不気味さに、一瞬身ぶるいし、背筋に寒さが走り、生きた心地はありませんでした。横にいる川上君や、同僚達も皆、がたがたと、ふるえ、顔色も真っ青でした。

魚雷航跡発見から数分経ったころ、右斜め後方になっていた第四多門丸の中央部から「ドカン」との大音響と共に大きく高く水柱が立ちました。引き続いて、船尾の方からも水柱が立ち昇りました。我々は、かたずを飲んで見守っていました。二本目の水柱が立った直後に、この船から、かすかに人の声が聞こえ、甲板の上を行き交う兵の影が見え、恐怖と絶望が渦巻き、阿鼻叫喚あびきょうかんの修羅場となりました。

私は身体から血の気が引く思いで眺めました、どうすることもできません。

あの船には「南方に着いたら、またあいましよう」と笑顔で別れた同郷の行橋駅前出身の杉本君の顔が浮かび、何とか助かってほしいと思いました。困ったときの神だのみではあるが、ふるえる声で、「天の神様、貴方の力をもって、杉本君の命をお守りください。またこの船をお救いください。我等の船が無事目的地に着くことができますようお願いいたします。この願いを尊き主の御名によりお願いいたします。」と何度も祈りました。

再び眼を開け右後方を見ましたが、今度は左後方の少し離れた位置になり、我船はジグザグに進行方向を変えながら進んでいます。第一四多門丸は、ほぼ停止し、船の中央部から火災が起こった模様でした。数分後我が船は、今度は向きを大きく右に変え、火災を起している横の僚船りょうせんが再び右真横約一キロメートルくらい離れた位置になりました。

我々は、ただじっと見守るのみで、助けることも何もできません。その内僚船から爆発音が出ているようでしたが、見る間に船首の方を立てて、船尾の方から一気に沈んでいきました。

一瞬の出来事で、誰もが無言のまま、いつまでも沈んで行った第一四多門丸の跡をじっと見つめていました。

戦争と言うものは実にむごく、悲惨なものだと思ひ、ま

た私が入隊する時、職場の責任者から、出征に際し、贈られた言葉を思い出しました。

「我国は今や

大東亜共栄圏だいてうあきょうえいけん

の確立と平和と

繁栄のために戦

っている。貴方

は今ここに国に

召されて兵役に

つかれるわけで

あるが、どうか

国民の代わりと

して、この目的

に向かって軍務

に精励してくだ

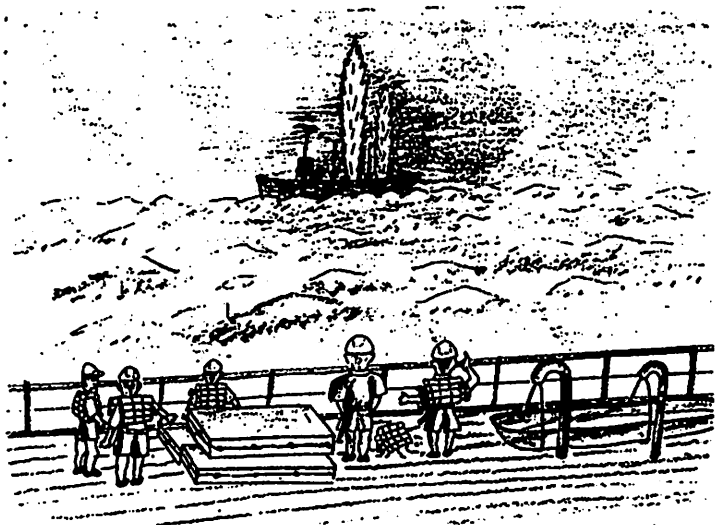
さい」と。

今日の戦争が、ほんとに大東亜共栄圏の平和と繁栄のため

の戦いなのか、我国が、独・伊と同盟を結び、他の世界中の

国々を相手に戦っているが、ほんとにこれが聖戦なのか、勝

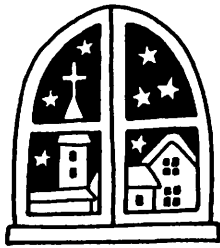
算があるのか、我々のこの大輸送船団の航行に、我が帝国海



軍の艦船が一隻もないのはどうしたことか、また現在の船の位置は鹿児島島の沖を航行していると思われるのに、既にこの近海にまでも敵潜水艦が近づき、待ち伏せしていたとは、どういうことなのか、ほんとにこの戦いが聖戦であるのならば、神様が、きつと守ってくれるだろう。等と考えながら、甲板上で夜露に濡れながら、シヨックと心労の中で、うとうとしながら長い一夜を過ごしました。

夜が明けて海を眺めると船の進路の右側に転々と小島が現れ、その後方二キロメートルくらいの距離に大きな陸地が見えました。海面の色は茶褐色でした。船は中国大陸の沿岸に沿って南下している様子で、とにかく魚雷攻撃からやっとなし放されたなど、兵達は安堵の気持ちとなり、それぞれ持ち場に散って行きました。

(以下次号)



北欧四方国周遊旅行訓

正野 真宏 (前田)

これは、いわゆる旅行記ではない。旅行の中で教えられたこと、感じたことの記録である。

旅行先 フィンランド、スエーデン、ノルウェー、デンマーク

日程 平成十三年九月十九日から二十八日まで (十日間)
参加者 二十名 (定員三十名だが、テロ事件の影響か、減少)

一 神は目覚し時計である

いよいよ出発の朝である。昨夜はなかなか寝付かれなかった。いつ眠ったかはわからないが、ふと目がさめた。あたりはまだ暗い。どうしてこんな時間に、と思いつつ時計を見る。四時三十分きっかりだった。その途端、私は飛び起きた。昨夜寝る前、明日は五時半の一番電車に乗らないと遅れるので、四時半に起こして欲しいと祈ったことを思い出したからである。私は神の臨在を感じ、恐れおののいた。

ここまで見ると、なんとすごい信仰かと思われるかもしれないが、実は、もし遅れたら高い旅行代金がパーになる

ことを恐れ、不信仰にも、五時四十分にベルが鳴るよう目覚ましをかけていたのである。こんな不真実な者の祈りにも、弱さを思いやることのできる神は真実に答えてくださった。私の不信仰を一言も責めたまわず、お前を愛しているぞと言われているように思えた。私は神の広い御愛に感謝するほかなかった。そして、今度の旅行は、必ず神が守り、導いてくださることを確信したのである。

二 人生は手ぶら旅行である

予定通り家を出る。手には軽いショルダーバッグを持っているだけである。重いスーツケースは、すでに福岡空港に届けられているはずである。この十日間の旅行で、スーツケースを持って移動するということはなかった。空港に着いても、ホテルでも、ポーターが全部してくれた。それだけではない。切符の手配も、観光は説明付で、食事も、宿泊先も、全部用意されていた。私達は、ただ体一つ持つていけば良い。文字通り、手ぶら旅行なのである。もし、これを全部自分でやらなければならぬとすれば、旅行を楽しむところではない。

私は、これは正に福音であると思った。「あなたの荷をエホバに委ねよ」。主に任せた人生は、正に手ぶら旅行、楽チ

ン旅行である。主が重荷を全部負ってくださった。私の罪の重荷さえも。私の旅行は必要な代価を払わなければならなかったが、福音は、その代価すらも十字架によって払われているのである。こんな嬉しいことはない。何たる感謝であることか。

三 人間は自然に逆らってはならない

関西空港からオランダのアムステルダム空港で乗り継ぎ、フィンランドのヘルシンキへ行く。通算飛行時間十四時間。重労働である。太陽を追いかけて行くので、日は暮れない。昼に出發して、その日の昼に着く。時差は八時間。頭時計も、腹時計も全部狂うことになる。特に睡眠時計が破壊される。今日は日本時間の四時半に起きて、フィンランド時間の午後十一時に寝たので、結局約二十七時間、一睡もせず起きていたということになる。

それでも、行きの場合はそれほどの影響はなかったが、帰りは夕方出て、寝られないまま早朝に着き、変な時に眠くなる。いわゆる時差ぼけである。立ち直るのに、一週間位かかった。人間は自然には逆らってはならないとつくづく思う。

四 神と私の「ヤア」

フィンランドに着き、ホテルまでの車中で、ガイドさんからフィンランド語を学ぶ。その中で、挨拶の略語で「ヤア」(こんにちは)、「ヤアヤア」(さようなら)を覚えた。

これは北歐四カ国の共通語らしいが、「ヤア」は万国共通ではないかと思った(相槌にも使っているように思えた)。なんと親しみのある言葉だろう。この一言で心が通じるのである。

私は、ふと神様と私達との関係を思った。「初めに言があった」神の言なるイエス様を通して、神が私達に近づいてくださり、私達も言なるイエス様を通して神に近づき、親しく交わることができる。

そういえば、ヨーロッパでは過去、お互いに侵略戦争を繰り返していたが、今日、EUと言う一つの国の形態を整えつつある。テロ事件直後で入国手続は普段より厳しいとの事だったが、思ったより簡単である。通貨も来年からユーロに統一される。国と国の垣根が一つ一つ取り除かれていく。

かつては、私達と神とは罪のゆえに遠く離れ、敵対していた。しかし今は、十字架によって神との和解ができ、近い者とされた。私達は恐れなく、神に近づき祈ることがで

きる。まことに身勝手な祈りが多いが、神は懇ろに聞いてくださる。それは、「ヤア」と呼び合う、そんな親しい関係となつたのではないかと思うと、嬉しくなつた。

五 天国へのフリーパス

ヘルシンキからノルウエーのオスロまでは国際列車で移動する。約四時間の旅である。

北歐に来て一番驚いたことは、鉄道に乗るのに(勿論、切符は必要であるが)改札口がないことである。乗り降り自由である。無賃乗車が増えるのではと心配したくなるが、聞けば、それは本人の良心の問題だと言う。

根底には、幼児期からの自立とか自己責任とかに対する徹底した教育がある。加えて、北歐四カ国ともプロテスタントが国教になっていて、九割以上がクリスチャンであるということも影響している。教育と信仰、これが国家を形成している土台になっていると思った。だから約束は守る。だから、国は安泰し、強固である。

私達の天国行きの切符はどうであろうか。十字架と言う二倍の代価が払われ、すでに切符(約束)は無料でいただいている。勿論、改札口はない。お前の切符は料金が足りないとか、お前の行いが悪いから駄目だとか注意されない。

フリーパスである。なんと嬉しいことではないか。そんなことを考えていたら、早くオスロに着いたような気がした。

六 固定観念に捕らわれてはならない

外国へ行つてよく戸惑うのは、日本とやり方が違うことである。今回も失敗をしでかした。例えば、ホテルのエレベーター。日本であれば、どのエレベーターがどこへ行っているか、どのエレベーターが早く乗れるかわかるようになっていているが、ここはその表示がない（勿論全部のホテルではないが）。だから、常に目をキョロキョロしていないければならない。着いても、自動ドアになつていないので、自分で開けてから乗らなければならぬ。日本式で開くのを待っていたら、勝手に通り過ぎてしまったことが何度もあった。乗って降りる時も同じである。自分でドアを開けないと、先へ行ってしまうのである。

それから、ルームキーの使い方である。ホテルに着いて、鍵を渡され、不安げに差し込んでみる。一度で開くと歓声を上げてしまう。二度三度やってみても開くと、段々あせってくる。あるホテルで、いろいろやってもどうしても開かない。仕方なく、添乗員さんと呼んで、助けてもらう。すると、同じやり方で開くではないか。なんと、私達

はドアを部屋の方へ押し込んでいたのであるが、手前に引くようになつていたのである。後で大笑いしたことであるが、今までがそうだったから、ドアは押すものと思ひ込んだ固定観念に捕らわれていた失敗である。

信仰も同じである。神の福音は、神様流のやり方がある。それを自分流の考えでやっても、過去の経験でやろうとしても、テコでも動かない。神様が定めたやり方に従わなければならぬ。そのやり方は聖書に記されている。その通りやれば、神の恵みの戸は開かれるのである。まずは、人間の固定観念を捨てるべし、である。

七 主は公平の神である

ノルウェーに入る。皆さんもお感じだと思ふが、地図を見ると、フィンランドとスエーデンは共に平地が多く、面積も広い。ところがノルウェーはスカンジナビヤ半島の端つこの山岳部を南北に細長く、申し訳なさそうに位置しており、スエーデンがいい所を腹一杯取っているように見える。民族的にはほとんど変わらないと思ふのに、この違い。不公平ではないか。私はノルウェーの人達がかわいそうに思えた。

ふと、創世記のアブラハムとロトの事を思い出した。ロ

トは低地の肥えた土地を取ったが、アブラハムは山岳部で承知した。見た目では大きな差があったが、神様はアブラハムを恵まれ、ロトは墮落していった。

スエーデンとノルウエーは、ロトとアブラハムのように思えた。それで、ノルウエーのことが気になっていたのである。

オスロから北海側のベルゲンの町までバスで山越えをする。山また山である。谷間には牧草地が広がり、ヤギや羊を飼っている。それがなんとも言えない平和と穏やかさを私達に与えてくれる。決して豊かではないと思うが、神様がここの人達を恵んでおられるように思えて、嬉しくなった。

運転手のオットーさんが自分の家の側を通るので、寄りましようということになった。美しい湖のほとりの素敵なお家だった。六十を超えていると思われるが、奥さんと二人暮らしで、夜はベランダに出て、星を見ながら寝るのだと言う。なんとロマンチックではないか。神様の恵みに抱かれながら生活している様子がうかがえた。華やかな街のネオンは、ここにはない。ただ自然の中にいる。それで十分ではないかと思った。

フィヨルドに出る。これは氷河が山を削り取ってでき

たものだという。信じられないような神の力である。切り立った岩の間を船で通る。すごい迫力と美しさに身が引き締まる思いがした。

ノルウエーはEUには加盟していない。他の国とは競争する力がないからだとのこと。平地が少ない地理的な悪条件も影響しているのかも知れない。しかし、平和な国を築いている。物の豊かさは日本ほどないかもしれないが、ここには自然の中で育まれた心の豊かさがある。福祉も日本以上に充実している。本当の豊かさと幸せとは何かを考えさせられた。神様はアブラハムを祝福されたように、ノルウエーを恵んでおられることを見て、安心した。まことに神は公平の神である。

八 私は神のVIPである

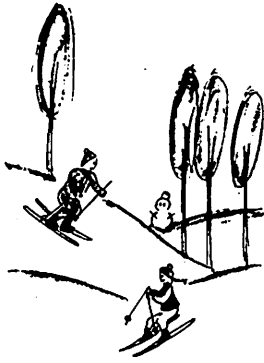
VIPとは「あなたはわが目に尊く、重んぜられる者」(イザヤ四十三・四)の英語の頭文字を取ったもので、一般的には特別待遇とか、国賓待遇する時に使われる。

今回の旅ほど、大きなトラブルもなく、天候にも恵まれた旅はない。時期的にも北欧は雨の多いところである。一日二日は雨を覚悟し、雨具も用意していたが、一度も使うことはなかった。特に、一番楽しみにしていたフィヨルド

ド巡りの時も、三日に二日は雨が降るといふベルゲンの町
観光の時も、時折、日が射していた。ベルゲンのガイドが、
昨日は雨が降っていたのに、皆さんはついていると言つて
いた。

添乗員も、今回は天候に恵まれてよかつたと言つたので、
私はすかさず、「私はクリスチャンだが、イザヤ書にこうい
うことが書いてあつて、神様が私をVIP扱いしてくれる
ので、天候も祝してくださつたのだよ」と話すと、彼女は
VIPが聖書から来ていることに驚いたようだったが、そ
の意味するところは分からず、「有り難うございます」とだ
け言つた。

しかし、私にはそう思えて仕方がなかつた。主は、私が
どこへ行くとも共にいてくださる。他の人を犠牲にして
も私を守ると言われる。文字通り、VIP扱いである。そ
う思うと、うれしくてならなかつた。



福岡浜町基督伝道館（福岡大濠公園教会の前身）
思い出の断片 昭和七年頃から二十年頃まで

野村 末義（前田）

福岡浜町基督伝道館は、私が救われた昭和七年一月頃は、
浜町の通りの魚町寄りの路地を入つた所の突当りに、普通の
平屋建の家が会堂でした。畳で座布団が敷かれて集会が行わ
れていました。昭和八年から教会堂は、同じ浜町の末永さん
の会社の（たしか丸五運輸の会社と聞きました。）二階事務所
の跡に移転しました。二十畳以上の大広間で、北側と南側と
が障子窓になつていて、明るく広い会堂で、夏には浜風が北
から吹きぬけてとても涼しい会堂でしたが、さすがに冬場は、
寒い風や雪が強く当りました。座布団を五列か六列位に縦長
くしいて集会を致しました。

集会は日曜日朝八時半より日曜学校を、

十時：聖日礼拝、午後二時リバイバル祈祷会、

夜七時半：伝道集会

水曜日夜七時半：祈祷会

金曜日夜七時半：路傍伝道

火く土曜は毎朝五時半：早天祈祷会

これが一週間の定例集会で、折滝先生のご用で行われまし

た。又、他に家庭集會が、たしか第三木曜日に久留米の西さん宅で、又第一木曜が吉井（筑後）にと出張されました。

伝道集會では、初め頃、田島兄や松田兄が司會のご用に當り、日曜學校の様に模造紙にリバイバル唱歌や靈感賦を書いて歌いました。

講壇は會堂南側の窓の方にあり、二段程疊より高くなつていました。向つて左側には、オルガンがあり、殆ど鷹取姉（献身者）が担当で早天祈祷會を初め伝道會も祈會も凡て讚美歌や靈感賦など弾いておりました。右側には、床にリノリウムを張つたスペースに、グランドピアノが置かれていて、末永の実枝子さんが礼拝の讚美歌を弾かれ、又時には宮内昌子さんが弾かれた事もありました。

日曜の午後は二時から、リバイバル祈祷會でしたが、この時は會堂中央に座布団を円形に並べて、十数名が集まりました。集まる人は、大体、末永雪姉、鷹取姉、榎本師に私と、花田兄、平岡兄姉、西弘道兄などで、聖言を与えられてから、各自が重荷を負うた事柄や問題を持ち出して、或る人は病人のために、又は、青少年の問題とか、大きく國のために、政治のため、偶像信仰の人々のためにとか、様々な事で次々と回りながら祈り続けました。

そして靈感賦や、リバイバル唱歌などを歌つて非常に燃や

されたものでした。

講壇については、一寸書き忘れましたが、上等の木を使つて造られていましたので、ペンキやニスをぬらないで、豆腐のおからで、磨き上げました。毎朝、早天祈祷會が終つて、おからを買ひに行きまして、半分は食料で、半分を布の袋に入れて、丁寧に磨いて綺麗にしました。

お説教の時、先生の立たれる卓の足元に、座布団を、又卓の左側にも一枚の座布団を置きました。それは、集會が始まり先生が先ずお祈りをなさる時に、又説教の後の祈りの時にその座布団に座つて祈られました。

又、折滝先生は、話される時に、時々喉を潤しなされる事がありましたので（多分扁桃腺のどがお悪いためでした）、必ず、水とコップを盆にのせて卓上に置いていました。之はずつと最後まで続きました。

日曜日の朝八時半前、日曜學校の前に、二階の講壇のある方の窓硝子を開けて、大太鼓を叩いて（主として榎本師）トランペット（野村）、外に小太鼓やタンバリン等でチャイムの代りに近所の人々に案内しました。後にこの音を聞いて、一人の病氣の方が、信仰を求めておられたと云う事を聞きました

た。

この太鼓やトランペット、小太鼓にタンバリンと、もう一つ、赤い十字架のついた灯籠を加えて、金曜日の夜は、路傍伝道に行きました。魚町や簀子町、六本松、柳原、港町方面にと、あちらこちらの街角で行いました。

メンバーは、榎本師、鷹取姉、野村、初めの頃には、鹿子木姉や中野兄、田島兄、松田兄、後には、平岡兄姉、花田勇兄、城戸兄等が参加しました。誰かが立って証しをした後、折滝師や榎本師が説教をされました。聞く人が一人でもあればその人に向って、誰も聞く人が無ければ、家の中に向って、大声を張り上げて、伝道し又讚美をなし、喜んで感謝して帰りました。祈を以て出発、帰って又祈りました。

トランペットは、昭和九年頃だと思えますが、折滝先生が買い求められ、私に吹く様に云われ、早速、本を買い、全然分らないもので、一から練習をはじめました。丁度、その頃、佐伯憲治さんがおられました（末永弘海先生の弟で、元、海軍に楽隊で吹奏楽をやっておられた専門の方でした。）ので、色々教えて頂いて、何とかリバイバル唱歌も賛美歌も吹く様になれました。後には、市で催された講習会にも出たりして、本格的に習って吹いておりました。本当に感謝でした。

もう一つ、路傍伝道には、警察の許可を要しましたので、

その前日迄に、派出所に行き、許可願の書類を出して、許可を得ました。

特別集会は、記録も説教ノートも空襲で焼けてしまつて確かではありませんが、大体、末永ご主人の召天記念日頃に、毎年位、三月か四月頃だったと思いますが、藤村壮七先生がおいでになられ、エペソ書などのお説教をして下さいましたのを覚えていきます。

時折、末永弘海先生や宣教師イエーツ先生、また沢村先生など来られて特別集会をして下さいました。聖会は、四日も五日も続き、いつも盛会で恵まれて来ました。

伝道館に於ては、集会は勿論の事、凡ての事に於いて常に祈りが捧げられて、主の全能のみ手を動かす働きをしていた事を、はつきりと云う事が出来ます。そこに力と祝福があり、今日もそれが続いているのだと信じます。之は先に、私が「伝道館の思出」に書きましたが、朝に夕にと良く祈りました。

幸に、教会及牧師館の裏には、末永さんの庭があり、そこは広い立派な庭で、宗像方面の海岸の松だという、すばらしい松が何本もあり、芝生が奇麗でした。大小の岩や植木も花もあつて相当なものでした。

そこに、祈りの場を貸して頂いて、折滝先生や榎本先生、

鷹取姉など、各々良き場所を得て、朝まだ暗い中、夜も夜露にぬれて、寒い冬は毛布や丹前をかぶって、夏の夜は香にさされ乍ら、ウチワを使って祈りました。

教会のため集会のため、多くの魂のため、ご病人のためにと、次々に祈りました。今日は、誰もいなくて一番に来たと思つてると、もう既に誰かの祈りの声が聞こえている様な事でした。

修養生の部屋は二階会堂の隣にあり、四畳半に押入つきでした。

或時、私共の部屋に泥棒が入った事がありました。多分玄関の鍵をかけるのを忘れて寝たのか、或は、こじあけて入ったのか、二階の部屋に寝ていたのに全然気がつかずに眠つたのに、主は目覚めて守つて下さいました。

その翌朝、早天祈祷会が終つた時、玄関に尋ねて来られた人が、私のオーバーコートを抱えておられ、「お宅のではないか」と持つて来ましたとの事に驚きました。全然知らぬ間に自分のオーバーが人の手にあるとは、うかつな事です。なくなつておればその冬はオーバーなしで震えていたはずの所でした。

その方の話によれば、朝おきて見るとその方の門扉の上に、

チョンと引掛けてあつたそうです。多分ポケットの中に現金でもと思つて急いで取つてみたら、何もなかったもので、面倒だと捨てて行つたものでしょう。助かりました。それ以来、この方が教会に来られる様になりました。この方こそ、城戸高義兄です。

大東亜戦争が始まつて少し位でしたか、時期は定かではありませんが、珍しく熱心に各集会に励んで来られる人がありました。

昼の集会も夜の集会でも、真剣に渴いて来る人だと思つていました。処が、暫らく後に本人の正体を知つて驚いた事に、この人は、所謂、特高警察の刑事だったのです。キリスト教は敵国の宗教であり、スパイの行動でもありはしないかと、何か不都合な事でもあれば、早速手を入れる考えだったのでしよう。

然し、主のお守りの裡に何の出来事もなく守られ安全でした。戦時中では、或教会ではスパイやその他の疑いで捕らえられた、牧師先生方も多く、大変な時代でした。

戦争もはげしくなり、何処でも物質的に乏しい時代でした。教会が大きな屋敷の中にある事から、毎日のように、物乞い

のお客さんがやって来ました。

所謂、当時の言葉で、ルンペンと称していました。「何か食物を恵んでくれ。」とか、「郷里に帰る旅費を貸して呉れ。」とか、時には、〇〇〇刑務所を出て来たばかりの者だと、すぐんで無心する者もありました。この応対には、いつでも榎本師が上手に話をし伝道されました。

霊も肉も飢えて乏しい時代でありました。

早天祈祷会の出席者は、名前を忘れて思出しませんが、一寸覚えています方々は、末永（雪）老姉の他は、松田兄、田島兄、中野兄、鹿子木の二ご家族、平岡兄姉、花田勇兄ご一家、大谷姉、宮内姉、城戸兄姉、大橋姉妹、岩崎姉、長島兄姉。尚、之だけは忘れられない方があります。私が救われて間もない、昭和七年頃、私は、地行西町に住んでいました。その当時、早天祈祷会に出るには、今川橋からの一番電車に乗って五時半の集会に出たのですが、次の電停地行東町から必ず乗って来る若い娘さんがありました。この方が、秦梅子さんでした。

長年の病床生活から、イエス様を信じて、信仰により立上って喜んで集会に出られていました。痩せ細った病後の体でしたが、主にあつて強められておられました。この方が、ク

リスマスの感謝会で、小さな声でしたが、力をこめて、心からの喜びと感謝で主を讃美された時の記憶は、今も心に残っていて消える事がありません。それは次の歌でした。

旧さんびか六十八番でした。

一節、三節は省略しますが、

二、 あやめもわかぬ夜

あらしはたけりて

あれにしあれたる

なみまにただよひ

しづむは今かと

死を待ちしときに

のぞみとなりしは

ベツレヘムの星。

この讃美歌は、梅子姉のお証しそのものでありまして心を打たれました。

榎本先生が、姉妹の最後の時にお祈り下さって、平安と勝利で召天なさいました。

榎本先生が八幡に遣わされて行かれた後は早天祈祷会の準備が大変でした。それ迄は、どんなに夜が遅くても、必ず朝は早く目覚めて準備して下さいました。ついで乍ら書きます

と、夜の集会后、折滝先生と私たちの祈りの時が終りますと、先生とご一緒にお茶と交わりの時でした。その時は色々と靈的なご指導を頂き、又、先生の落合時代の柘植先生のお話や、山陰時代の事など、時の過ぎるのを忘れて、やっと十二時を過ぎ一時近くなつてしまふ事がよくありました。そして朝五時には起きませんと、早天祈祷会に来られた皆さんのために、門をあげ、玄関をあげねばなりません。

寝坊の私には、榎本先生の様に早く目が覚めませんので、切に祈りましたが、うつかり寝過ぎたら大変、皆さんを外に立たせてしまいます。暖かい時なら、よいとしても冬の寒い時は大失敗です。冷汗をかく事がありました。余程、私の胸中に強く残っているのか、五十年以上も経っている今でも、時々この失敗の夢を見る事があります。

夢で思い出す事がもう一つあります。毎月一回（明確ではありません）が第三木曜（？）筑後の吉井に、夜七時半からの家庭集会に行きました。（名前は立山さんでしたか……？）

折滝先生、榎本先生、と私が順番の交代で遣わされて行きました。午後から出発して夜の集会の帰りは、遅くなり、久大線で、久留米でのり換えて帰る終電車は、旅になれぬ私には、うかつに居眠りもできず緊張と祈りでした。この時に駅

で乗換の時間に、切符も買えずに取残された夢を、今頃も時々見ては、やれやれと胸をなでおろします。

昭和十年か十一年頃と思います。折滝先生の新年聖会のお説教を私がノートしたものから書き出して、一冊の本を造りました。

題名は「十字架の福音」でした。現物は残念乍ら、空襲の時に焼かれました。然し、今もはっきりと「十字架の福音」が心に浮かびます。之こそ折滝先生が、柘植不二人先生以来受け継いで信じ、又標榜して来られたものであり、今に至るも変らざる純福音の基として残っているものだと思います。

又、初めに戻りますが、昭和七年から八年頃にかけて、私はまだ地行西町に居ました頃、平岡さんが鳥飼におられて、近所の子供達を集めて火曜学校が行われました。平岡さん夫妻に花田勇さんや平岡さんの姪で、よしの姉など、それに私もお手伝いをさして貰いました。

何しろ珍らしく近所の子供達が大勢集り、一ころは百人位が集り、中々の盛況？でしたので、收拾するのが大変でした。殊に下駄の整理には困りました。間違えたり紛失したりでひたすら祈るばかりでしたが、之等は私も大いに恵まれる事で

感謝でした。

教会は末永さんの屋敷に続いていましたので、末永さんのご一家の方が集会に出られていました。浜町周辺や魚町には、大谷冬子さんのご一家や、高橋さん、花田勇さん一家、（以上は魚町）玄関の門の傍の家には、初めの頃は筑山さんのご家庭が、次は積山さん、その次は城戸さんの家庭と次々におられました。門の内側のすぐ傍には、伊熊さん一家、その又奥には、鹿子木さん一家が住んでおられました。門を出て浜町の通りには住宅が並んでいて有名な黒田家別邸など大屋敷もありました。すぐ近くに、中野さんがおられ、人形を造っておられた出西さんの一家、向い側にはマッサージの大橋さんなどおられて集会に出ておられました。箕子町では、岩崎姉、長島姉、後に吉留さんもおられました。

その他では、黒門に花田さん、お兄さんの新一郎兄、唐人町、鳥飼、六本松には、中野くに姉がおられました。この奥さんは、私を伝道館に導いて下さった方です。

都島春来兄は箕島だったと思います。平岡兄姉は博多駅前で果物屋さんでした。又、古い下駄屋さんのお店をされた小林はる姉などの方が集会に出られていました。あと余り記憶に残っておりません。

土曜日の午後は、信者の方々の家を、鷹取姉と榎本師と私と、三方に別れて、訪問をして、日曜礼拝へのおさそいを致しました。

折滝先生が、野菜や花の種を買って来られましたのを、私共がそれを蒔いて苗を造り、育てました。胡瓜や茄子、南瓜なども苗から育て、造りました。畑は、牧師館の裏に庭があり、元末永さんのテニスコートだった所を耕して造らせて貰いました。神様の祝福で皆良く出来ましたので、食卓に上りました。南瓜などは、長いのが石垣の上に沢山転がっていました。キャベツも大きな玉が沢山できました。玉葱も収穫したのを竹竿につるしてしまっていました。畑のふちにはバラの木を植えて、肥を入れ、モミ殻をおいたり、時には町で馬糞を見たら拾って来て根元においてやりましたが、沢山の花が咲いていました。

丁度薔がふくらむ頃、一夜のうちに薔薇の根元が虫にやられて被害をうけましたので、それを防ぐため紙のテープで巻いてやったり大変な事もありました。モミ殻で思い出しますのは、折滝先生が、アスパラガスがお好きでしたので、畑のすみに植えて、モミがらを深く高く積み上げて新芽の柔らかいのを出させ、収穫しました。

牧師館の中庭には、大きな無果樹（いちじく）が二三本井戸畑の近くにあり、之が時期になると次々に大きな美味しい実がなつて、お子さん達の何よりのおやつでした。日当りのよい南側でしたから、珍しい草花も咲きました。香高い西洋すみれの小さい紫色の花が咲く春先には沢山咲くと廊下までにおいました。折滝先生のお好きな花でした。

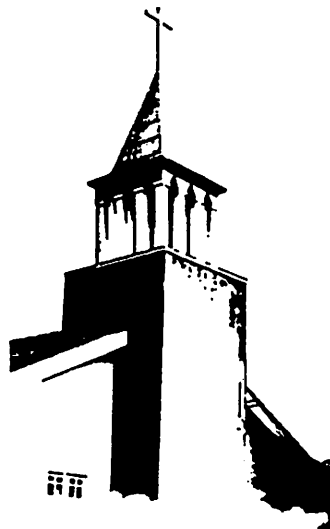
畑の一隅には伝書鳩を飼っていて、遠方に行く時にケースで持って出て、行く先から家に状況や連絡を足につけて放すと、無事に帰りました。又鶏舎を造り、数羽の鶏を飼ってましたが、玉子もよく産んでました。一時は、ひばりを飼いました。又鷹も飼ってました。之は城戸さんが山に行つた時に捕えたのですが、皆子供さん達の勉強の参考にしました。ひばりは、すり鉢で、鷹は、鯛や鯖の頭を魚屋で貰いました。何もない時は大きな蛙をその俣やりました。中々賑やかでした。

昭和二十年六月一九日は、福岡市に、アメリカ空軍機B二九やグラマン等の沢山の編隊がやって来た大空襲の日でした。夜八時過から空襲警報が出て、西の方から爆撃が始まり、遂に福岡上空に物凄い爆音と光と火とが市街に広がって、特に浜町も、すぐ近くの上の橋には、二十四師団司令部及兵舎が

ありましたので、集中して焼夷弾に見舞われて、伝道館も、末永邸から浜町一帯は焔に包まれて終い、さながら最後の審判の様相を見せられました。一夜明けた朝は、焼けただれた木々や灰の山でした。

万物はやがて消え失せる時、主の命の聖言だけが限りなく永遠に立ち続ける事でしょう。

之からが福岡大濠公園教会へと時代は移って行きます。





2002年 1 月20日

福岡大濠公園教会



2002年 1 月 1 日

八幡前田教会 (1)



2002年 1 月 1 日

八幡前田教会 (2)



2002年 1 月 1 日

八幡前田教会 (3)



2002年 1 月 1 日

八幡前田教会 (4)

編集後記

◎『ぶどうの木』第二九号をお届けします。

◎『心をつくして主に信頼せよ、自分の知識にたよってはならない。すべての道で主を認めよ、そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。』

(箴言三章五、六節)

さまざまなことからのうちに、主が働いて下さっていることを見せていただき、感謝致します。

◎『わがたましいよ、主をほめよ、

そのすべてのめぐみを心にとめよ。』

(詩篇一〇三篇二節)

◎恵を心にとめ、忘れないようにするため、今後もお証、またカットなどを随時募集しております。

◎発行が大変遅くなり、すみませんでした。

発行 二〇〇二年四月

発行者 福岡市中央区鳥飼二―二―二六

基督伝道隊 福岡大濠公園教会

牧師 榎本 和義

発行所 基督伝道隊

八幡前田教会

福岡大濠公園教会

戸畑教会

印刷製本 北九州印刷株式会社